

《資料》

「九月騒乱」期における騎士領プルシェンシュタイン所属集落(南ザクセン)からの請願書(I)

松 尾 展 成

初めに

ザクセン王国の最重要の農民解放立法は、1832年償却法と1850—51年の改正・補充法であるが、これらの法律が公布される直前には、民衆運動が都市においてのみでなく、農村(領主権の支配下にある都市<sup>(1)</sup>を含む)においても高揚した。したがって、これらの農村民衆運動に対する上からの対応が、上述の32年法と50—51年法であると見なされるから、「九月騒乱」期(1830—31年)と「三月革命」期(1848—49年)との農村民衆運動の解明は、ザクセン農業史研究上の重要課題である。

このうち、「三月革命」期についてはツァイゼによって優れた成果が公表されている。しかし、「九月騒乱」期の農村民衆運動はほとんど明らかにされていない。そして、この究明は、1831年の憲法と翌年の都市自治体条令を含めて「ザクセン改革」の三大法律と呼ばれる32年償却法が、ザクセン農民解放の基本的方向を決定した事実<sup>(2)</sup>に留意するならば、一層強く要請されるのである。

ところで、「九月騒乱」期の農村民衆運動が研究史上未開拓であるという事情は、一つには、原資料の所在と関連する。民衆運動の方向を示す最重要資料としての請願書について見てみると、「三月革命」期に夥しく提出された農村住民の請願書は、48年臨時邦議会および49年邦議会に宛てられたものが多く<sup>(3)</sup>、それらは国立ドレーズデン文書館(かつてのザクセン王国中央文書館)の邦議会文書として保存されている。ツァイゼが主として利用したのがこれであり、わたくしも49年邦議会宛リプティツ、マネヴィツ両村の請願書を紹介したことがある<sup>(4)</sup>。しかしながら、「九月騒乱」期の農村住民の請願書については事情が異なっている。

ヴィーン復古体制のザクセン版たるアインジーデル(Detlev Graf von Einsiedel)の

政権に対する国民各層の不満は、ドレーズデンとライブツィヒでの1830年6月の蜂起ののち、パリ七月革命の影響を受けて同年9月2日商業都市ライブツィヒで爆発した。騒乱は9月9日には首都ドレーズデンに、さらに工業都市ケムニツなど各地にも波及し、<sup>(5)</sup>主要都市では民兵団が警察力を掌握するに至った。そして、この「九月騒乱」への支配層の対応は、9月10日の、王族フリードリヒ・アウグスト（同月16日以後は王族ヨハン）を議長とする「公安維持国王任命委員会」の創設、同月13日における、フリードリヒ・アウグストの摂政就任とリンデナウ（Bernhard August von Lindenau）への政権交替、同月23日の前述ヨハンの全ザクセン民兵団総司令官への任命であった。<sup>(6)</sup>

この「公安維持国王任命委員会」は創設の翌日9月11日に、委員会が『公共の、また、都市の諸問題についての要望と提案を受け取り、吟味する』旨を告示した。<sup>(7)</sup>委員会は同年11月7日の解散の際には『当委員会において今なお解決され、あるいは、届け出られるべき事柄は、今後は再び〔従来通り〕、権限ある該当の官庁に、あるいは、それが官庁自体についての苦情であるかぎり、枢密院に……訴えるように』と公示している。<sup>(8)</sup>こうして、いわゆる「マイセン県120村請願書」は1830年10月に「国王任命委員会」宛に、グラスヒュテ市他29村の請願書は31年2月に摂政宛に、いわゆる「ランゲンロイバ請願書」は32年2月に邦議会上院宛に提出されたのである。当時公刊されたこれら3請願書の主要部ないし一部は、別稿において紹介されている。<sup>(9)</sup><sup>(10)</sup>

それでは、当時提出された農村住民の厩大な請願書、とりわけ、多数を占めたと考えられる「国王任命委員会」宛請願書、の原本は今日どこにあるか。個々の村あるいは所領についてのきわめて具体的な内容を含んでいたにちがいないそれらの請願書の原本は、所在不明である。少なくとも一括して保存されてはいない。ドレーズデン国立文書館には公安維持国王任命委員会文書という文書群が存在しないのである。そこで、ザクセン王国の諸官庁文書および個々の所領文書の調査が必要不可欠となってくる。

本稿は、ザクセン北部リプティツ、マネヴィツ両村の1830年11月の国王宛請願書（国立ライブツィヒ文書館、ヴィーデローダ所領文書）の紹介に引き続いて、ザクセン南部の騎士領<sup>(12)</sup>プルシェンシュタイン（Purschenstein）所属集落1市5村から1830年10月に提出された6通の請願書（5通は「国王任命委員会」宛、1通は摂政宛）と1832年11月の説明文書（領主裁判所宛。いずれも国立ドレーズデン文書館、プルシェンシュタイン所領文書）を署名の日付の順に紹介しようとするものである。

ただし、これら6通の請願書および32年11月の説明文書は原本ではない。写しないし抜粋と冒頭に書かれていない唯一の請願書たるディッターズバハのそれ（第1図参照）も、末尾の署名が同一筆跡と考えられる（第2図参照）から、他の請願書などと同じく、領主





側役人によって当時書き写されたものであろう。しかし、これらの写本も原本と大差なく、抜粋でさえ重要論点は省略していないと考えられる。なお、この文書はかつてプルシェンシュタインの所領文書館<sup>(13)</sup>でエレミアスによって発掘され、ディッタースバハ村請願書の一部はヤコバイトの著書に収録された<sup>(14)</sup>。けれども、そこには脱落・誤植が散見されるので、本稿はその部分も省略しないで紹介する。

以下では、偶数ページに請願書独文が、その次のページに、独文におおよそ対応する訳文が示される。独文を区切るBl. は葉の表面、bはその裏面を意味するが、それらの区分は訳文では顧慮されない。

印刷上の理由で、原文における、とくにラテン語系の単語についての書体の差異は無視され、貨幣単位ターラー(Thaler, Reichsthaler)、グロッシェン(Groschen)、プフェニヒ(Pfennig)についての記号は Tlr, Gr, Pf で代用される。註はすべて訳文に付けられるが、必ずしも同一ページに印刷されていない。

訳文の段落は原文のままではない。1つの長い段落を数個に分けた場合もあり、いくつかの短い段落を1つにまとめた場合もある。原文で価格など数字を示す改行箇所は、訳文では考慮されない。

請願書訳文では敬語表現は行なわれず、敬語の形容詞、副詞は……で示される。貨幣単位ターラー、グロッシェン、プフェニヒは訳文では簡単のために Tlr, Gr, Pf で、容積単位シェッフェル(Scheffel)、メツェ(Metze)も Schf, Mtz で表わされる。訳文における〔 〕は訳者の追加である。

これらの請願書提出の集落が所属した騎士領プルシェンシュタインについては、同時代の地誌から次のことが分かる。この所領はエルツ山地の中部、ボヘミアとの国境に近い、当時のエルツゲビルゲ<sup>(17)</sup>県フライベルク特別管区<sup>(18)</sup>の最南部にあり、一円支配集落<sup>(20)</sup>だけで見ても1市(ザイダ)<sup>(19)</sup>と16ないし17村を領有する巨大な、領邦君主直属の騎士領である。山地<sup>(21)</sup>であって気候は厳しく、土地は痩せているにもかかわらず、17世紀から工業、とりわけ木材加工業が発達したために、この所領はザクセンで最も人口稠密な地域の一つとなった。その人口として挙げられる数字は、地誌執筆者によって異なり、少ないもので8,400人近く(1826年)、多いものでは10,300人以上(1834年)である。

その領主は14ないし15世紀から継続してシェーンベルク家(von Schönberg)であり、ノイハウゼン(Neuhausen)村の一部をなすプルシェンシュタインに城館、醸造所、「城の水車」<sup>(23)</sup>を、また、ザイダ、ノイハウゼンなど数ヶ所に護送税徴収所<sup>(24)</sup>をもち、さらに上級、下級裁判権<sup>(25)</sup>、すべての狩猟権<sup>(26)</sup>を把持する。所領役人は領主裁判所<sup>(27)</sup>長の他に相当数の裁判所役人<sup>(28)</sup>、地代徴収所役人、林務役人、多くの猟区番人などである。プルシェンシュタインの

「大分農場」、ザイダの「新分農場」、ハイダースドルフの「小分農場」<sup>(29)</sup>を含めた直営地の耕地面積は600アッカーを超え、森林は広く（附近には広大な国有林もある。）、改良種牧羊場<sup>(30)</sup>は大規模である（1820年に1,700頭）。

この直営地は1820年頃6,000 Tlr<sup>(31)</sup>で賃貸されていたが、著るしい経営改善（馬鈴薯栽培の拡大、火酒生産の拡張、羊飼養数の増大など）のために、その利益ははるかに大きいはずである。この所領の純収入は合計19,000 Tlrと推定されている。

宗教行政上はこの所領はドレーステン上級宗務庁フライベルク地方監督部に所属する。所領内には7つの僧職とそれより多数の教師職とがあり、教会保護権<sup>(32)</sup>は領主の手中にある。<sup>(33)</sup>

以上のように、この所領は、ザクセンの通常の騎士領10に匹敵する、あるいは、これと肩を並べるものはあまりない、と評価されるほど巨大な騎士領であった。<sup>(35)</sup>

そして、この所領でも1830年秋には農村民衆運動が高揚した。当時の1新聞は次の記事を載せている。『重圧的な諸負担からの最終的な解放についての報知を間もなく受け取った農村住民は、あちこちで、例えば、エルツゲビルゲの大きな村ポルシェンシュタイン（Porschenstein）<sup>(36)</sup>で、すべての畜賦役と手賦役を拒否し、それが2倍も必要な時期〔農繁期〕に農場領主とその〔農場〕借地人を困惑させている。』<sup>(37)</sup>

ところで、ブラシュケによればザクセンには、ポルシェンシュタインなる名称の村も、村の一部分も存在しない。<sup>(38)</sup>しかし、同時代の地誌によれば、我々が問題にしている Porschenstein は、その他に Borsenstein, Porschenstein とも表記されたから、この記事のポルシェンシュタインがブルシェンシュタインを指すことは確実であろう。<sup>(39)</sup>

しかしながら、ブルシェンシュタインは「大きな」騎士領の名称ではあるが、集落としては村ではなく、大きな村ノイハウゼンの一部にすぎない。したがって、上の新聞記事は、エルツゲビルゲの大きくない集落ブルシェンシュタインで、あるいは、「大きな村」ノイハウゼンで、あるいはまた、「大きな」所領ブルシェンシュタインで、賦役拒否が発生した、と理解されるべきであろう。<sup>(40)</sup>以下に紹介する請願書は、このように激化した農村民衆運動と密接に関連していた、と考えられる。

(註)

- (1) 近世のザクセンには統一的な都市制度は存在せず、都市は法制上次の3種に区分されていた。(以下で「ザクセン改革」以前について記述がなされる場合、対象地域は、ブルシェンシュタイン所領を含むザクセンの本領地域に限定され、農場領主制の地域に属するオーバーラウジツは考察の対象とされない。)(i) 領邦君主直属都市(schriftsässige Stadt)。これは、都市共同体の自治機構としての市参事会を形成しえたと

かりでなく、都市領主から裁判権(大きな都市を除けば下級裁判権)をも獲得したために、領邦君主に直属しており、身分制議会第3院に代表を派遣しうる都市である。(ii) 管区所属都市(amtssässige oder Amts-Stadt)。この種類の小都市においては市参事会は形成されたが、裁判権は都市領主たる領邦君主にお所屬して、領邦君主が管区(後註18)を通じて支配する。(iii) 領主(封臣)所属都市(adlige, Patrimonial-oder Vasallen-Stadt)。この種類の小都市は(ii)の都市と法制上同一の段階にあるが、その都市領主が騎士領所有者(後註12)である点で、(ii)と異なる。

(ii)と(iii)の都市は身分制議会に代表を派遣しえず、その市民は都市領主から賦役・貢租を賦課される。したがって、彼らは領主との関係において農民に近似しているわけである。もちろん、(i)の都市にあっても、領邦君主の干渉は決して小さくならなかった。——1831年の憲法はすべての都市に、邦議会下院におけるその代表の選挙権を与えた。また、翌年の都市自治体条令によって都市の自治権は拡大し、中央政府に対してもすべての都市が同一の関係に立つことになった。しかしながら、それまで領主権の支配下にあった都市に関しては、裁判・警察権は従前通りとされていた。(それ以後の裁判・警察権については後註(12)参照。)なお、極小都市の中には、さしあたりは旧来の制度のままに留まり、1838年公布の農村自治体条令を受けて、農村自治体に転換したものもある。Engel, S. 154; Reinhardt, S. 283—287; Kötzsche 1931, S. 19—20; Blaschke 1962, S. 15, 26—29; Blaschke 1965a, S. 282; Schmidt 1966, S. 140—141, 145—146; Zeise 1968, S. 263; Schmidt 1973, S. 21.

- (2) Zeise, 1965 a (その紹介, 松尾1971 a, 121—138ページ); Zeise 1965 b; Zeise 1966; Zeise 1968; Zeise 1969; Zeise 1970; Zeise 1972.
- (3) その他にフランクフルト国民議会宛にもザクセンの多数の村落から請願書が提出された。その内容については、柳沢, 172—177ページ。
- (4) 松尾1979 a, 60—62ページ; Matsuo 1979 b, S. 190—191.
- (5) 民衆運動は翌31年にも4月にドレースデンで、8月にライブツィヒで高揚した。そして、前者は、当時としてはもっとも民主的なモスドルフ(Bernhard Moßdorf)の憲法草案を生み出した。その一部の紹介, 松尾1973, 128—129ページ。
- (6) 以上については、松尾1973, 103, 106—109ページ。
- (7) Böttiger, S. 663. なお, Hase, S. 15, では単に「都市の諸問題」となっている。
- (8) Bekanntmachung, S. 3133.
- (9) この請願書は「44村請願書」,あるいは、起草者リヒター(Moritz August Richter)にちなんで「リヒター請願書」とも呼ばれている。
- (10) 松尾1973, 110—119, 136—139ページ; 松尾1978, 145—157ページ。
- (11) 松尾1979a, 57—60ページ。
- (12) Rittergut は、領邦君主の管区(後註18)とならんで、ザクセンにおける封建的土地所有の主要な形態である。これはブラシュケによれば、16世紀以降、領主権をもった、領主居館と農業経営用建造物との統一体を意味する。それが領邦君主の所有の下にある場合は、御料地(Kammergut, Domäne)と呼ばれ、その領主権は管区によって行使される。Vorwerkは近世においては、遠隔の Rittergut に属する農業経営用建造物(分農場)であって、領主権を付属させてはいない。他方で、稀には trocken-

Rittergut も存在する。これは、領主権のみを把持していて、領主居館も農業経営用建造物ももたない Rittergut である。Blaschke 1957, S. VI; Blaschke 1965 a, S. 235—237. 以下ではわたくしは Rittergut を、領主の農業経営、あるいは、その償却以前には領民の賦役で経営された領主直管地、が主として問題である場合には、騎士農場と訳出し、騎士農場と結合した領主権が主として指示される場合には、騎士領と訳出する。——騎士領の所有は領邦君主と貴族ばかりでなく、農民を除けば、教会、学校、市参事会、市民にも許されていた。本来の騎士農場には、すなわち、騎士農場のうち、農民追放によってそれに併合された課税農耕地を除く部分には、租税免除の特権が賦与されていた。ところで、本領地域には3種の領主権のうち人身支配権は存在しない。しかも、土地領主はほとんどすべて(16世紀に95%以上)が同時に下級裁判領主であり、時には(17世紀に20%以下)上級裁判領主でもあった。そして、この下級裁判権には行政・警察などの公権的機能が付属していたのである。——騎士領の領主権は「ザクセン改革」以後その意義を減少させる。すなわち、土地・裁判領主権に基づく領民の土地負担は、1832年償却法を起点として償却されてゆき、裁判権などの公権的機能も、一定の国家補償をとまなう家産裁判権の国家移譲(1856年)によって大幅に縮小した。その時に認められた警察監督権は、一般の都市・農村自治体については1874年から郡に移された。1843年の地租改正で騎士農場の免税特権は国家補償により廃止された。1834年からは騎士農場の取得が農民にも許された。Römer 1788, S. 291—292, 573; Römer 1792, S. 154; Engel, S. 205—213; Judeich, S. 62—63; Haun, S. 72; Behrendts, S. 22; Reinhardt, S. 77—78; Kuntze, S. 32, 39—40, 82—83; Kötzschke 1953, S. 109—110, 117—118, 121, 132; Stulz, S. 16; Lütge, S. 28—39, 102—103; Blaschke 1962, S. 18, 32—35, 39; Blaschke 1965a, S. 240—241, 248, 286—287; Zeise 1965a, S. 257; Schmidt 1966, S. 150, 154—155, 313, 315; Groß, S. 26—28, 124; Zeise 1968, S. 248; Schmidt 1973, S. 21, 23, ——1838年の農村自治体条令以来、行政単位として自治体と併存してきた領地区域(Gutsbezirk)は、1923年の自治体条令により廃止された。ただし、1905年12月1日のザクセンの人口は4,508,601人であったが、1904年初の領地区域(その総数1224,うち騎士農場905)の人口は55,685人にすぎなかった。また、1831年の憲法で規定されていた邦議会選挙に関する騎士農場所有者の特権は、ヴァイマル革命により消滅した。Volkszählung, S. 218; Zeichart, S. 62; Blaschke 1962, S. 40—41; Schmidt 1966, S. 142.

- (13) この所領の文書が国立ドレーズデン文書館に移管されたのは1963年である。同国立文書館の1980年2月20日付回答。
- (14) Jacobeit, S. 140—141.これをわたくしは試訳したことがある。松尾1972, 18—20ページ。
- (15) 1 Tlr=24 Gr. 1 Gr=12 Pf.
- (16) 1 Schf=16 Mtz. ドレーズデンの1 Schf は1869年に103.83  $\ell$  と換算された。Kötzschke 1953, S. 159; Lütge, S. 56.
- (17) ザクセンの県(Kreis)は、16世紀中葉に創設された領邦国家の中級監督官庁であるが、実質的意味をほとんどもっていなかった。これは1835年に廃止され、権限の強化

された中級行政官庁としての県統治部(Kreisdirektion)、および中級司法機関としての控訴裁判所(Appellationsgericht)が設置され、1874年からはこの県統治部が県(Kreishauptmannschaft)となった。1835年以後、旧フライベルク特別管区はドレーズデン県統治部の、1874年からはドレーズデン県の管轄の下に置かれた。Blaschke 1954, S. 89—90, 102; Blaschke 1956, S. 359—360; Blaschke 1962, S. 15, 17; Schmidt 1966, S. 30, 261—265, 303—305.

- (18) ザクセンの管区(Amt)は、15世紀に創設された領邦国家の地方統治機構(司法、財務、行政)であり、領邦国家の権限拡大とともにその権限を拡大した。そこで1780年代から、司法・行政を担当する司法管区(Justizamt)と、財務を担当する出納局(Rentamt)との機能分化が生じた。司法管区は騎士領・市参事会などの家産裁判権の国家移譲にともない1856年に廃止され、裁判区(Gerichtsamt)が設置された。1874年には地方レヴェルでの司法と行政との分離が実現して、裁判区の機能は地方行政官庁としての郡(Amtshauptmannschaft)と地方司法機構としての郡裁判所(Amtsgericht)とに移った。これに対して出納局は、管区への賦役・貢租の償却が進行するにつれて、また、改正された地租を含む直接税は地区租税徴収所(Bezirkssteuereinnahme)の担当とされたために、次第に権限を縮小して、1865年に国有林出納局(Forstrentamt)に転換された。Blaschke 1954, S. 83—85, 88, 104—106; Blaschke 1956, S. 345—347, 352; Blaschke 1957, S. X—VI; Blaschke 1962, S. 14—16, 19; Schmidt 1973, S. 19, 21—22. 本稿で取り扱われる諸集落は、1856年以後はザイダ裁判区に、1874年からはフライベルク郡に編入された。Blaschke 1957, S. 301—310. —これらの管区のうち、若干のとくに重要なものが特別管区(Kreisamt)と呼ばれた。

(19) この都市については、その請願書を紹介する際にふれる。

- (20) 騎士領は、都市と同様に(ただし、前註(1)の(iii)に該当する騎士領は存在しない。)法制上次の2種に区分された。(i) 領邦君主直属(schriftsässig)のもの。その所有者は領邦君主の官房から直接に命令を受け取り、全員が身分制議会第2院に出席しうる。彼らに係わる裁判は中央官庁、1822年からは上級宮廷裁判所(Oberhofgericht)、に係属される。このような騎士領には下級裁判権ばかりでなく、上級裁判権も帰属する場合が多い。(ii) 管区所属(amtssässig)のもの。その所有者は領邦君主の命令を管区を介して受け取り、身分制議会第2院に出席する代表を、管区別に選出する。彼らに係わる裁判は第1審では管区に、その後中央官庁に係属される。このような騎士領には下級裁判権のみが帰属し、その上級裁判権は領邦君主(管区)に帰属する。しかし、両者の差異は16世紀以降、領邦国家とその管区が権限を拡大するにつれて、実質的には縮小した。そして、1831年の憲法はすべての騎士領所有者に、邦議会上・下院におけるその代表の選挙権を与え、1835年の上級宮廷裁判所の廃止によって君主直属騎士層の特権的裁判権は消滅した。Römer 1788, S. 292—293; Römer 1792, S. 162—166; Engel, S. 207—208, 212—213; Haun, S. 71—72, 154; Behrendts, S. 3—4; Reinhardt, S. 45, 77; Kuntze, S. 34—36, 39; Kötzschke 1953, S. 121; Blaschke 1954, S. 85, 88, 103; Blaschke 1962, S. 15; Schmidt 1966, S. 278—279, 303, 306—307.

(21) その全部ないし一部分がこの所領に所属する19集落のうち、海拔520—595mのもの

- 9, 610—695mのもの8, 700—710mのもの2, である。ちなみに、ドレーズデン市の標高は113m, フライベルク市400mである。
- (22) これは、1834年にプルシェンシュタインを含めて151戸、人口1,072人の大きな村であった。Schumann, Bd. 7, S. 59—65; Schumann, Bd. 18. S. 285; Schiffner, S. 627—628, 635; Blaschke 1957, S. 307. この村の高度は534mで、集落としてのプルシェンシュタインのそれは570mである。
- (23) この水車は、ディッターズバハ請願書(Ⅱ) — (M) でその製粉強制について訴えられており、かつては領主が所有していたとされる水車のことであろう。——製粉強制(Mahlzwang)は裁判領主の特権に属する。Haun, S. 110—121; Lütge, S. 108. この強制は1838年に、義務者によって償却されるべきものと定められた。Judeich, S. 71; Bär, S. 24; Groß, S. 114.
- (24) 護送税(Geleite)は道路の安全のために、後には道路の維持のために徴収された。市参事会あるいは裁判領主がこれを把持している場合もしばしばある。Römer 1788, S. 612—613, 616—617. Vgl. Steuern 1858 b, S. 85—86. この「私的護送税」(Privat-Gleite)はドイツ関税同盟への加盟のために同種のすべての公課とともに1833年12月4日および12月9日の法律により補償と引換えに廃止された。Gesetzsammlung 1833, S. 219, 462. Vgl. Steuern 1858 b, S. 90; Reinhardt, S. 305.
- (25) 裁判領主権を含む家産裁判権(Patrimonialgerichtsbarkeit)は、上級裁判権(Obergerichtsbarkeit)と下級(世襲)裁判権(Nieder-oder Erbgerichtsbarkeit)とに区分された。前者は、特権的裁判籍をもたないすべての領民について、殺人、放火など重大な刑事事件を第一審として処理する権限である。後者は領民に関してすべての民事訴訟と一定の刑事事件(傷害など)を第一審として処理すると同時に、契約を発効させ、土地保有権の移動、抵当権の設定、後見人の指定を承認し、治安を維持する権限である。Haun, S. 154—155; Kuntze, S. 21—25; Körner, S. 11; Stulz, S. 17; Lütge, S. 107; Blaschke 1962, S. 33——裁判領主権については次のことが留意さるべきである。ザクセンの家産裁判所は独自に判決を下すことはできなかった。本来の判決はより高いところで、すなわち判決団(Spruchkollegium)(領邦国家の中央官庁たる審判委員会(Schöppenstuhl),あるいは大学法学部)において下されたのである。「家産裁判領主の任命した領主裁判所長は、事実上は裁判所の管理人にすぎず、決して裁判官ではなかった。」彼は取調べを行ない、そのすべてを書き記した文書を判決団に送った。「この法律専門家によって判決が、それらの文書の調査に基づいて下されたのである。裁判領主個人はこの手続において全く後景に退いていた。」Blaschke 1965 a, S. 245. Vgl. Schmidt 1966, S. 280—281. それでは裁判領主権の実質的意味は何であったか。ブラシュケは次のように述べている。「家産裁判権が裁判領主の手中にあったことは、彼が例えば、賦役を拒否している農民を随意に投獄あるいは絞刑によって処罰しえたことを意味するのではない。しかし、裁判領主権は憲法制定以前の国家では、警察権力を包含しており、ここに、土地領主の経済外的強制力の本来的意義があったのである。なぜなら、給付義務ある農民との、純粹に経済的な対抗から生じる多くのことが、警察的強制手段によって土地領主の利害にそって規制されたからである。しかしながら、後者〔農民〕が訴訟の道を選ぶやいなや、その対抗

は家産裁判権の平面から脱け出て、領邦君主＝国家の裁判権の中にはいりこんだのである。」Blaschke 1965 a, S. 245.——家産裁判権の国家への移譲は1856年であったが、それより前1835年には審判委員会その他の中央裁判所の廃止と最高裁判所(Oberappellationsgericht) および控訴裁判所の設置によって、司法における三審級制度が創出された。Schmidt 1966, S. 303—305.

- (26) ザクセンでは狩猟権は領邦君主の高権であり、領邦君主からの賦与ないし時効によってのみ騎士領の特権となる。Römer 1788, S. 778—779; Engel, S. 210; Lotze, S. 14—15; Zeise 1968, S. 263—264. 狩猟は、鹿などについて大物猟、猪などについての中物猟、狐などについての小物猟に区分される。大物猟は聖霊降臨祭(Trinitatis)(復活祭後の第7日曜日)後の第1日曜日に、他の猟はエギーディウスの日(Aegidii)(9月1日)に始まり、すべての猟は四旬祭(Invokavit)(復活祭前の40日間)の第1日曜日に終わる。Römer 1788, S. 780, 783; Lotze, S. 27. 他人の土地での狩猟権は「ドイツ国民の基本権」との関連で1849年3月に無償で廃止されたが、1858年には、義務者により償却さるべきものと改めて規定された。Judeich, S. 77—78; Lotze, S. 19—20; Zeise 1965a, S. 257.
- (27) 領主裁判所長(大所領では Gerichtsdirektor, 一般には Gerichtsverwalter od. -halter)は、裁判領主によって任用、解雇される。彼は1622年の領邦君主の命令により、法学教育を受けた専門家でなければならなかった。近くの都市の弁護士か公証人が大抵の場合この職務を引き受け、一定の日に領主居館にやって来て、彼にとって副次的なこの義務を果たした。Haun, S. 157—158; Körner, S. 24—26; Blaschke 1962, S. 34—35; Schmidt 1966, S. 284—286; Reißner 1972, S. 42; Reißner 1973, S. 224.
- (28) 裁判所役人のうち、法律専門家でなければならぬ書記官(Aktuar)は領主裁判所長によって、廷吏(Gerichtsbote oder -fron)は裁判領主によって任用、解雇される。Körner, S. 46.
- (29) この村については、その請願書を紹介する際にふれる。
- (30) 7年戦争以後のザクセンにおける改良種牧羊業の発展については、松尾1971b, 1—22ページ。
- (31) 近世のザクセンでは騎士農場の管理・運営が短期間の契約で農場借地人(Gutspächter)に委ねられる場合が多かった。大抵の農場借地人は農民身分であった。Haun, S. 73—74; Lütge, S. 38.
- (32) ドレスデンの上級宗務庁(Oberkonsistorium)は、宗教改革の後に領邦君主の宗教・教育行政のために創設された中級官庁、マイセン宗務庁が1606年に改組されたもので、その権限はライプツィヒの宗務庁(Konsistorium)と同一である。これらの中級宗務官庁は1835年に廃止され、その権限は県統治部に移った。Römer 1788, S. 129—130; Reinhardt, S. 43; Blaschke 1954, S. 92—93, 103; Blaschke 1962, S. 8, 17; Schmidt 1966, S. 30, 228, 272—273.
- (33) 地方監督部(Diözese, Superintendentur, Inspektion)は宗教改革以後の領邦君主の宗教・教育行政のための地方機構であり、ある管区の域内に存在する教区教会の教区のすべてを統轄する。その領域は1830年代にかなりに変更され、1879年には、郡

と原則的に重なる地方監督部 (Diözese, Ephorie) が設置された。Blaschke 1954, S. 92; Blaschke 1962, S. 16, 23. Vgl. Schmidt 1973, S. 32—33.

(34) 教会保護権 (Patronatrecht) は、領邦君主から封の一部として土地領主に与えられる特権である。この権利の中で最も重要なものは、領主が所領内の教会・学校の聖職者・教師を宗務庁に推せんする権利である。この、いわゆる聖職任命権 (Kollatur) のうち、教会聖職者を推せんする権利は1873年4月15日の法律により、騎士農場所有者が3人の候補者を信徒代表(Kirchenvorstand)に提案する権利に縮小した。学校教師を推せんする権利は1873年4月26日の法律によって廃止された。教会保護権に属する今一つの権利は、領主が地方監督 (Superintendent od. Diözesan) とともに教会財産を監視する権利であるが、領主のこの権利は1855年の家産裁判権の国家移譲とともに消滅した。Merkel, S. 9—15, 18, 21—22. Vgl. Römer 1788, S. 526—527, 529—530; Engel, S. 210; Reinhardt, S. 313; Zeise 1968, S. 248.

(35) 以上は Schumann, Bd. 8, S. 629—641; Schumann, Bd. 18, S. 528; Schiffner, S. 635—636, による。Vgl. Blaschke 1965 b, S. 290. —19世紀央の検地によって明らかになったザクセンの全騎士農場の「租税単位」で見ると、ブルシェンシュタイ

/Aufschrift/ Acta Die von mehrern Purschensteiner  
Ortschaften im Jahre 1830 bey höchster Behörde eingereichten  
Beschwerden betr. 1831—1833.

(Staatsarchiv Dresden. Gutsarchiv Purschenstein Nr. 580)

(1) Petition aus dem Dorfe Dittersbach vom 11.10.1830

/Bl. 2b/

(11.2.pr.13.Nov.1830)

An E. zur Aufrechthaltung der öffentlichen Ruhe allerhöchst  
verordnete Königl. Sächß. Commißion in Dresden

Allerunterthänigst gehorsamster Vortrag !

In dem festen Vertrauen und aus belebenden Hoffnung, daß es  
auch uns, ob wir gleich Vasallen-Unterthanen nur, unter Hoch-  
adl. Gerichtsherrschaft zu Purschenstein gehörig, sind, so  
sind wir doch auch treue Unterthanen unsers allerhöchst ver-  
ehrten Königs Anton und dessen von uns allgeliebten Mitregent-  
en Herzog Friedrich August, Prinz von Sachsen, vergönt sey,  
unser Anliegen zu allerhöchst Einer diese Verhältnisse prü-

ンのそれは28,074である。これは、年間の粗収益が9,300 Tlr を超えることを示している。騎士農場合計942のうち、この数値を上回るものはわずか6農場だけである。Steuern 1858 a, S. 20-26. 「租税単位」については松尾1979 c, 166ページ。なお、当騎士農場では19世紀に農業から林業への転換が行なわれたために、1913年の総面積(1919ha)のうち耕地・園地は59haにすぎず、大部分の1781haは林地となっている。Georgi, S. 84; Sieber, S. 220. また、1905年12月1日の領地区域ブルシェンシュタインの人口は88人であった。Verzeichnis, S. 48.

- (36) 農場領主 (Gutsherr) はザクセンの騎士農場を所有する領主である。Blaschke 1962, S. 33.
- (37) Deutschland, S. 677. Vgl. Reinhardt, S. 191.
- (38) Blaschke 1957, S. 43\*.
- (39) Schumann, Bd. 8, S. 629.
- (40) なお、1790年の「ザクセン一揆」に際しても当所領では、領主の羊放牧権をめぐる領主と農民の対立が激化している。松尾1972, 10ページ。三月革命期における当所領の民衆運動については別稿でふれる。

---

表紙 1830年に〔騎士領〕ブルシェンシュタインの若干の集落から最高官庁に提出された請願書に関する文書。1831-1833年。

(国立ドレーズデン文書館。ブルシェンシュタイン所領文書580号)

1. 1830年10月11日付ディッターズバハ村の請願書

(II. 2. 到着 1830年11月13日)<sup>(1)</sup>

ドレーズデンのザクセン王国公安維持国王任命委員会宛。

……上申。

我々はブルシェンシュタインの……裁判領主<sup>(3)</sup>に属して、封臣<sup>(4)</sup>の領民にすぎないけれども、……国王アントーン<sup>(5)</sup>および……摂政フリードリヒ・アウグスト<sup>(6)</sup>の忠実な領民でもあるから、実情調査国王任命委員会に懇願することが我々にも許されると確信し、かつ希望<sup>(7)</sup>

---

(1) この日付は、この請願書が騎士領裁判所に到着 (Präsentatum) した日を示すのであろう。II. 2. は裁判所の部門を表わすのであろうか。

(2) ディッターズバハ村は1834年に30戸、住民233人を持ち、ノイハウゼン教区に属する。永代村長の土地がある。木製品の生産が重要である。Schumann, Bd. 1, S. 655-

fende hohe Commission zu Fußen zu legen, so wagen wir es demnach, folgendes in tiefster Submission vorzutragen, als :

I)

/Bl. 3/ Königl. Angelegenheiten betr.

1) vor mehrern Jahren wurde alljährlich in den Königl. Waldungen zweymal öffentlicher Holzmarkt, erst im Frühjahr und dann im Herbst von denen verordneten Forstbedienten abgehalten, wo Jeder das, was er an harten oder weichen Hölzern zu seinen Bedarf nöthig hatte in Stämmen erhalten konnte, allein seit einiger Zeit ist dieses ganz unterblieben, und können nichts mehr auf diesen Weg, wo jeder sich den angenommenen Stamm oder Stämme nach seinen nützlichsten Gebrauch schneiden konnte, erhalten.

Zwar ist aus Gefälligkeit noch zu Zeiten, wenn die besonders in die Königl. Wälder

/Bl. 3b/ angewiesenen Unterthanen das für selbige geschlagne Nutz- und Brennholz jeder Art, an Mangel gleich prompter Zahlung nicht gleich abnehmen können, etwas zu erhalten, aber in welchen Preis ? und in welcher Beschaffenheit ist es als dann ? Buchne Hölzer, so auch Ulmen, Ahorn, und Eschen, welche man harte nennt, werden im Waldschatten stehend, wie allbekannt leicht stockend oder morsch, und sind zum Gebrauch wozu man es bestimmt, nicht mehr so nutzbar, so ist es auch mit dem Maaßscheid.

Die Preise sind jetzt aufs höchste gesteigert und gilt ein Schragen oder drey Claftern Buchen acht viert. Nutzholz anjetzt im Walde

Achtzehn Tlr 12 Gr - .

Alle Holzwaaren sind itzt um

/Bl. 4/  $\frac{3}{4}$ tel in Preis, wenn solche gefertigt sind, gefallen, hingegen die Holzpreise um  $\frac{3}{4}$ tel gestiegen, dahero Niemand bestehen kann.

wir bitten dahero in aller Unterthänigkeit, die alten Verhältnisse wieder herzustellen, und die Holzpreise zu mindern.

2) Die Fleischsteuer betreffend, besonders da wir keine Fleischbank separat haben, stehen wir eben so, wie andre Com-

して、以下の事柄を……上申する。

(I) 国王に関連する諸問題

- (1) 数年前〔まで〕は国有林で毎年2回、まず春に、次いで秋に、公開の木材市場が、任命された森林役人によって開かれ、そこで各人は、必要とする硬材あるいは軟材の樹木を手に入れることができた。しかしながら、しばらく前からこれは全く中止された。受け取った樹木を各人が利用上最も有利なように切りうるこの方法では、もはや何も手に入らないのである。

しかも、とくに国有林を頼りとする領民が、あらゆる種類の伐採された用材および薪を即金の不足のために受け取りえない時、なにがしかを〔役人の〕好意で受け取るが、その価格はどうか。また、品質はどうか。硬材と呼ばれる樺、楡、楓、トネリコは森陰に生えていて、周知のように、よく徴びて朽ちる。それは予定の用途には利用できない。割木(?)についても同様である。

価格は現在、最高にまで上昇しており、樺の用材1 シュラーゲンあるいは<sup>8)</sup>号〔の長さ〕の3クラフターが今では森で18Tlr 12Gr—する。すべての木製品は今日、それが生産されても、価格が号だけ下落しているが、反対に、木材価格は号だけ上昇した。したがって誰もやって行けない。

そのために我々は、かつての状態に再び戻し、木材価格を引き下げよう……請願する。

- (2) 肉税<sup>19)</sup>に関して我々は、肉売り台を別個に持っていないにもかかわらず、他の共同体

---

656; Schumann, Bd. 15, S. 171—172; Schiffner, S. 602—603; Blaschke 1957, S. 301. この村の標高は582mである。

- (3) この裁判領主(原文では Gerichtsherrschaft)は、「初めに」の註(12)で示されたように、土地・裁判領主権をもち、警察・行政などの公権的機能をも果たす騎士領の所有者を指す。
- (4) 近世ザクセンの土地所有者(騎士領所有者など)は、その土地を領邦君主から封(Lehn)として与えられ、領邦君主に宣誓した封臣でなければならなかった。Römer 1788, S. 13; Körner, S. 14. 1834年から、この封の世襲所有地への転化が認められることとなった。Judeich, S. 68; Schmidt 1966, S. 150. 封主と封臣との関係は、1872年5月22日の法律により解消される。Gesetzsammlung 1872, S. 264—265.
- (5) 松尾1973, 121ページ註(8)。
- (6) 松尾1973, 107ページ註(13)。
- (7) この委員会は公安維持国王任命委員会を意味すると考えられる。
- (8) 容積単位としてのクラフターには地域差があり、ここでの長さの単位は明らかでない。「初めに」で言及された、グラーズヒュテ市他29村の請願書においては、薪の容積

munen doch zu hoch, so oft es von neuen, nemlich von 3 zu 3 Jahren, sonst war es von 6 zu 6 Jahren im Creisamt Freyberg verpachtet wird, soll ein Mehreres verwilligt werden, an Minderung ist nicht zu denken.

Auch haben wir jederzeit, folglich auch itzt in einen abgekürztern Zeitraum die Pachtkosten allemal noch zu entrichten, daher wir bey der kurtzen Pachtzeit um Verminder- oder Verlängerung ehrfurchtsvoll bitten.

3) Bey dem uns ertheilten Gen. Accis-Fixo müssen wir itzt auch die Canzley-Sporteln noch extra bezahlen, sowie jeder Fixante auch noch - - 9 Pf welches sonst nicht war, und wo wir aller unterthänigst um Abstellung bitten.

4) unsre ganz kleine Commun bestehet incl. des Erbgerichts, welches zwar wegen unentgeltlich zu verrichtender Königl. und herrschaftl. Ge- und Verbote, in Herrschaftl. Diensten frey ist, mit aufhabender Eine halbe Hufe in

4¼ Magazin Hufe

also in 3¾ Hufe so herrschaftl. Dienste zu leisten hat.

/Bl. 5/ Hierauf haben wir alljährlich zu versteuern und zu verrechnen

430 gangbare SteuerBo à 58 Pf

beträgt

86 Tlr 13 Gr 8 Pf.

3 Tlr 8 Gr 9 Pf zu jeden einfachen Quatember

deren 49. sind, beträgt

164 Tlr 20 Gr 9 Pf.

8¼ Metze Korn

8¼ Metze Hafer

} zum kleinen Magazin

beträgt in Summa ohne dem kleinen Magazin, welches wegen steigend- und fallender Preise, nicht genau zu berechnen ist  
251 Tlr 20 Gr 5 Pf.

Hierzu sind wir nebst der Erbgerichts ½ Hufe nur

9 Begutherte,

9 Häußler, und

2 angebaute Haußgenossen

dieses ohne Reste aufzubringen, dürfte doch wohl zu schwer

と同じく、あまりにも高く課税される。新たに、すなわち、かつては6年毎であったが、〔今では〕3年毎に、フライベルク特別管区でこれ〔肉税〕の徴税請負がなされる度に、より多く〔の金額〕が同意されねばならず、引下げは考えられない。我々はまた常に、したがって現在も、短縮された期間について毎回、徴税請負手数料を支払わねばならない。

そのために我々は、徴税請負期間が短い場合には〔肉税の〕引下げを、あるいは〔請負期間の〕延長を……請願する。

(3) 定額の一般物品税<sup>10</sup>を定められている我々は現在、特別に官房手数料として、定額納税者当り——9 Pf を支払わねばならない。これはかつては見られなかったので、我々はそれの是正を……請願する。

(4) 全く小規模な当村は、永代村長の土地として賦課される<sup>11</sup>3<sup>11</sup>フーフエを含めて、4<sup>12</sup>倉庫フーフエよりなる。(これ〔永代村長の土地〕は、国王と領主の命令と禁令を無償で執行するために領主への賦役を免除される。したがって、領主への賦役は3<sup>13</sup>フーフエから給付されるのである。)

これ〔4<sup>13</sup>フーフエ〕から我々は毎年納税すべきであり、430の現行の租税ショック<sup>14</sup>にそれぞれ——58 Pf, 〔したがってショック税は〕86 Tlr 13 Gr 8 Pf となる。四季税1単位は3 Tlr 8 Gr 9 Pf で、その49倍〔に当る四季税<sup>15</sup>〕は164 Tlr 20 Gr 9 Pf である。〔軍用〕小倉庫<sup>16</sup>には8<sup>16</sup>4 Mtz のライ麦と8<sup>16</sup>4 Mtz の燕麦〔が納付される〕。合計では、価格が上下するために正確に計算できない小倉庫〔への穀物給付〕を含めずに、251 Tlr 20 Gr 5 Pf となる。

我々は、永代村長の土地<sup>17</sup>3<sup>17</sup>フーフエ以外には農民地保有者9人、小屋住農9人、耕作する借家人<sup>18</sup>2人だけよりなる。これら〔の租税〕を滞りなく負担することは、我々

単位が<sup>19</sup>4エレのクラフターとされている。Petition, S. 30.

- (9) 肉税は、1628年に導入された消費税である。販売用に屠殺される家畜からの肉税の税率は、自家用に屠殺される家畜からのその2倍である。Römer 1792, S. 582—583; Steuern 1858 a, S. 5; Steuern 1858 b, S. 85; Behrendts, S. 19. 1818年7月13日の法律によれば、事情によっては許される、肉税の『徴税請負においては、共同体が……優先権を与えられる。』Gesetzsammlung 1818, S. 42. Vgl. Reinhardt, S. 87. この肉税は1834年10月4日の法律により廃止され、屠殺税 (Schlachtsteuer) に代った。Gesetzsammlung 1834, S. 213. Vgl. Schmidt 1966, S. 154.
- (10) 一般物品税は1824年法によって規定された、物品税、営業税、不動産税の混合税である。(i) 物品税法上の都市 (accisbare Stadt) における一般物品税は、従来のラント物品税 (Landaccise), 一般消費物品税 (General-Consumptions-Accise) およ

für

/Bl. 5b/ uns werden, da wir nur Wenige sind, und besonders da wir in Herrschaftl. Dienstleistungen und Abgaben wie weiter unten specieller gesagt wird, auch hart betroffen sind.

5) An Straßenbauten auf der Einsiedler Commerziel-Straße nach Böhmen, sind wir so wie Friedebach und andre Communen belastet, und beziehen uns auf der Erstern Anbringen um nicht weiltlufftig zu werden, in allen Puncten und Clauseln.

Auch an der dort bemerkten Straße über Pillsdorf nach Freyberg haben wir nach unserm Antheil mit 33 Fuhren Steine, und von jedem Hübler ein Tag Handarbeit dabey unentgeltlich bereitwillig finden lassen.

Bevor sich aber unsre Gemeinde zu diesen Mitbau, welchen auch andre Communen anfäng-

/Bl. 6/ lich weigerten, hatten wir auf unserm Theil 6 Tlr 5 Gr 4 Pf Kosten zu berichtigen, welches die andern Commun nach gleichen Verhältnissen antheilig betraf.

Auch haben wir mehrere Communal-Wege in Standt zu erhalten, auch eine steinerne Brücke über den schon beträchtlichen Flöhistrom in Standt und itzt neu erbaut zu unterhalten, wovon die Herrschaft das Geleite beziehet, und doch sind wir nirgends Geleits frey, und müssen es überall entrichten, als ein Fremder,

wo wir allerunterthänigst um Abhülfe bitten wollen.

Nun wagen wir es

II)

auch die der Gerichtsherrschaft zufallenden Beschwerden in allerunterthänigsten Vortrag

/Bl. 6b/ bringen zu dürfen.

A) sind wir in Betreff der ungeheuer erwachsenden Inquisitions-Kosten eben so stark nach unserer geringen Begütherten-Hübler- und Haußgenozenzahl, sowie jeder andrer Ort hiesiger Gerichtsherrschaft, jeder nach Verhältniß seiner vorbefindlichen Contribuenten, was andre Communen, besonders Sayda ob es sich gleich, soviel uns wissend, von Ritterguth Purschen-

にとって非常に困難である。なぜなら、我々は少数であるからであり、とくに我々は、以下で詳細に述べられるように、領主への賦役と貢租によっても苦しめられているからである。

- (5) [ドイッチュ・]アインジーデル<sup>(19)</sup> [を經由して] ボヘミアに通じる通商路の道路建設<sup>(20)</sup>を、我々はフリーデバハ、その他の共同体と同じく課されており、長たらしくならないように、前者の苦情の全条項を引き合いに出そう。そこに書かれている、ピルストルフ<sup>(22)</sup>經由フライベルク [市]<sup>(23)</sup>への道路についても我々は、我々の分として33回の石材運搬と各小屋住農から1日の手労働を無償で果たすことに喜んで応じた<sup>(24)</sup>。しかし、他の共同体も最初は拒んでいたこの共同建設に当村が[同意する]<sup>(24)</sup>以前に、我々是我々の分として6 Tlr 5 Gr 4 Pfの費用を支払わねばならなかったのである。これは他の共同体にも同じ比率で課された。

我々はまた数本の村道を維持せねばならず、かなり大きなフレーア川<sup>(25)</sup>の石橋をも維持、そして今は新設せねばならない。これ[橋]から領主は護送税を取り立てるが、我々は護送税を全く免除されず、余所者と同じようにそれを支払わねばならないのである。

そこで我々は是正を……請願する。

(II) ・[裁判領主に関連する諸問題]

今度は我々は、裁判領主に係る苦情を……上申する。

- (A) 我々は、巨大になった糺問の費用に関して我々[当村]の土地保有者、小屋住農および借家人の僅小な数に応じて、ここの裁判領主に属する他の集落と同じく、現存する納税者に比例して非常に重く課税される。これを他の共同体、とくに、我々の知るかぎり、かつては所属の集落をもち、分離していた騎士領として、騎士領プルシェン

---

び製粉税 (Mahlgroschen) を統合したもので、その課税対象は次の通りである。(a)取引または消費のために都市に搬入されるすべての財。(穀粉、パンの場合は製粉税を含む。) (b)都市の営業。商工業およびパン焼、ビール・火酒醸造、屠殺からは営業物品税 (Gewerbeaccise) (パン焼の場合は製粉税を含む。)。その営業を営む時に、物品税に服する原料を必要としない者からは、生業税 (Nahrungsgeld)。(c)都市内で飼養されるすべての用畜。(d)不動産。この物品税は地租物品税 (Grundsteueraccise) と呼ばれ、家屋、納屋、園地に課税される。(ii) 農村における一般物品税は、従来のラント物品税と、村落商業に対する一般[消費]物品税とを統合したもので、(a)商業物品税、(b)生業税、(c)手工業者物品税、(d)パン焼、販売用屠殺、火酒醸造からの租税、よりなっている。Gesetzsammlung 1824, S. 89-106, 120-121; Steuern 1858 b, S. 84-85; Reinhardt, S. 86-87. この一般物品税の税額固定化、いわゆる物品税確

stein, als ein sonst separat gewesnes Ritterguth mit seinen früher darzu gehörig gewesnen Ortschaften sich ganz separat zu machen allerunterthänigst gebeten hat, sowie auch die mit uns auf diese Art verschwisterten Communen Neuhausen, Seyfen, etc. in gleichen Verhältniß, und haben also diese hart drückende Last mit allen gemeinschaftlich zu tragen.

/Bl. 7/                    Offen müßen wir gestehen, diese horrent un-aufhörbare Last fällt uns für die Zukunft zu schwer, und wir können solches ohne Zuthun Königlich oder Gerichtsherrschaftlicher Mitleidenheit nicht mehr allein tragen.

Es dürfte, wenn man es wohl ermißt, eine Wohlthat des ganzen Landes seye, wenn ein District deßelben von Mörder und sonstigen Vagabonden gereinigt wird, welche sich in ein ganzes Land, ohne bestraft zu werden, ausbreiten würden und könnten? Aber sollen wir deren Bestraf- und Vertilgungskosten, wenn sie just in hiesigen District betroffen worden, die ein ganzes Land interessiren, und auch Königl. amtliche Unterthanen betreffen könnten, wenn solche Vagabonden dort einfallen soll-

/Bl. 7b/                    ten, auch geschieht! — wenn sie sich hier nicht mehr sicher glauben und wissen ganz allein tragen?

wäre wohl unsers allerunterthänigst ohnmaasgeblichen Einwands gewiß zu viel verlangt; wir bitten daher allen Unterthanen gleich, allerunterthänigst: daß

von Seiten Er. Hochpreißl. Landesregierung ein nicht von uns vorzuschreibender Beytrag aus irgend einer dazu geeigneten Casse des Landes an das Judicium zu diesem Behuf alljährlich ausgezahlt wurde, um uns eine allerunterthänigst erbetne Lindrung zu schaffen. Auch von Seiten allhiesiger Gerichtsherrschaft und Judicio könnte ein merklicher Selbstbeytrag zu diesen seit 1814 ungeheuern

/Bl. 8/                    Kosten geleistet werden.

wir bitten in aller Unterthänigkeit, auf diese unsre Bitten besondere Rücksicht zu nehmen, unsre allerunterthänigste Bitte zu erfüllen, und mit allergnädigster Resolution zu beglücken!

B) Ob wir gleich mit vielen andern Diensten aller und jeder

シュタインから全く分離するよう……請願したザイダ〔市〕、さらにまた、我々とのように関連の密接な村々、ノイハウゼン、ザイフェンなども同じ比率で〔課税される〕。したがって我々は、非常に重いこの負担をすべて〔の共同体〕と共同で負担せねばならないのである。

率直に言って、この法外に間断のない負担は我々にとって今後は重すぎる。我々はこれを国王あるいは裁判領主の助力なしに単独ではもはや負担しえない。処罰されることなく全国に広がるかもしれない殺人者とその他の浮浪人が、我が国の1地域から取り除かれることは、我が国全体の幸福であると推測される。しかし、我々がその処罰と抹殺のための費用を次のような場合に全く単独で負担すべきであろうか。彼ら〔犯罪者〕が全国に関係のある当地域〔国境地帯〕を襲い、国王の管区領民をも襲うかもしれない場合に、このような浮浪人がそこ〔管区村落〕に侵入する場合に。彼らがここ〔当所領〕をもはや安全でないと考えた場合には、そうなるであろう。

我々の……考えでは、あまりに多く〔の糺問の費用〕が要求されている。そこで我々はすべての領民と同じく、……本領統治局が、我々に指定されるべきでない分担金を、何か適当な国家金庫からこれのために裁判所に毎年支払って、我々に……軽減を与えるよう……請願する。当地の裁判領主と裁判所からも、1814年以來のこの巨費に対して相当の自己分担金が支払われうるのである。我々は、この請願をとくに考慮して、この……請願を叶え、最も寛大な決定を恵むよう……請願する。

(B) 我々には裁判領主へのあらゆる種類の他の賦役が山のように積み重ねられているけ

---

定 (Accisfixationen) は共同体、営業、個人に対して3年の期間で契約された。Reinhardt, S. 90. — 一般物品税 (都市の製粉税および、製粉税の代りに農村に導入されていた3 Pf のショック税と四季税3単位を含む) はドイツ関税同盟加入と関連して1833年法により廃止された。Reinhardt, S. 305. Vgl. Steuern 1858b, S. 90; Schmidt 1966, S. 153. ただし、地租物品税の廃止は1843年9月9日の地租改正法による。Gesetzsammlung 1843, S. 98.

(11) Erbgericht は Erblehngericht や Lehngericht と同じく、永代村長 (Erbrichter) の職と結び付いた農民地で、エルツ山地にしばしば見出される。これは一般の農民保有地より大きく、賦役免除、ビール小売権などをもつ場合が多い。Römer 1788, S. 304; Römer 1792, S. 196—197; Gruner, S. 456; Kötzschke 1953, S. 98; Blaschke 1955, S. 105; Blaschke 1965a, S. 259—260; Dietze, S. 93—94. 永代村長を含む村長は、近世において村落共同体の代表者ではあるが、Richter なる名称にもかかわらず、領主裁判所の単なる陪席者にすぎない。領主裁判所が中世末期以來その権限を拡張してきたからである。ただし、ザクセン南部高地の大規模な森林フエ村落では、北部平地の中小村落におけるより共同体の自治権が維持されていた。

Art bey der Gerichtsherrschaft stark überhäuft sind ; so sind wir doch auch genöthiget, alljährlich

55 Tlr 3 Gr 4 Pf

an baren Dienstgeld nach Purschenstein zur Renteinnahme zu entrichten, wo wir dann, wenn wir die in natura zu leistenden jährlichen Hand- und Fuhr-Dienste speciell nachstehend werden verzeichnet haben, es E. allerhöchsten Beurthei-

/Bl. 8b/ lung überlaßen, wie solches zu vermindern sey; wo wir

um allerhöchste Einwirkung und Minderung allerunterthänigst bitten.

C) Sonst hatten wir alljährlich

56 Malzfuhren

alljährlich zu verrichten, da diese nicht mehr zu Malz erforderlich sind, und gebraucht werden; da in Purschenstein selbst gemalzet wird, so ist solches nach der Zeit in

84 Tage lang,

zu Dünger- und Ackerfuhren verwandelt worden, welche unsre kleine Commun leisten soll und muß, wo wir der Billigkeit gemäß

um Linder- und Mindrung allerunterthänigst bitten.

D) Ueberdieß müssen wir auch alljährlich noch

3 Schf. 14 Metzen Korn

54 Schf. 14 Metzen Hafer

} als

/Bl. 9/ ein Zinsgetreide oder drockne Zinsen an die Gerichtsherrschaft oder deren Oeconomie-Pachter abgeben.

Wir haben es oft, wenn es uns im Winter zu Brod oder Nahrung dienen müssen, zur Ablieferung im Monat Februar nicht mehr auf den Boden.

Wo kommt denn der Saame her ? wo wir

allerunterthänigst um Minderung anflehen !

E) Nun folgen ganz ungemene Hofe- oder Arbeitstage, als:

1) alle Aecker, so mit Lein auf dem Ritterguth Purschenstein, incl. des großen Vorwerks besamet werden, müssen vor der Saatzeit von Quecken und Unkraut von uns gereinigt werden, deren Scheffelzahl nicht bestimmt, sondern willkührlich ist, und oft

れども、我々はさらに毎年 55 Tlr 3 Gr 4 Pf の賦役代納金を現金でプルシェンシュタインの地代徴収所に支払わねばならない。そこで我々は、生の形で年々給付すべき手賦役と運搬賦役を後段で詳細に記載する時に、これがいかに引き下げられるべきかを、お上の判断に委ね、お上の介入と引下げを……請願する。

(C) かつて我々は56回の麦芽運搬を毎年果たさねばならなかった。プルシェンシュタイン自身で麦芽が製造されるので、麦芽のためのこれ〔運搬〕がもはや必要でなくなった時、その時以後これ〔運搬賦役〕は84日間の肥料運搬と農業用運搬に転換された。これを小規模な当村が果たさねばならないのである。そこで我々は正当にも軽減と引下げを……請願する。

(D) その上に我々は毎年なお 3 Schf 14 Mtz のライ麦と 54 Schf 14 Mtz の燕麥を穀物賃租<sup>34)</sup>あるいは、乾燥した賃租として裁判領主あるいはその農場借地人に納入せねばならない。それ〔穀物〕は我々にとって冬にパンあるいは生計のために役立つので、しばしば我々は2月には、納入すべきそれを屋根裏にもはや持っていない。それでは種子はどこから出てくるか。そこで我々は引下げを……請願する。

(E) それに続くのが全く不確定の御館賦役あるいは労働賦役である。

(1) 大分農場を含むプルシェンシュタインの騎士農場で亜麻が播かれるすべての耕地において、我々は播種期以前にカモジグサと雑草を取り除かねばならない。そのシェッフエル数〔面積〕<sup>35)</sup>は定まっておらず、恣意的であり、しばしば20—30シェッフ

---

Kuntze, S. 69—71; Quirin, S. 66; Blaschke 1962, S. 36; Blaschke 1965 a, S. 272—273; Reißner 1972, S. 424; Reißner 1973, S. 224—225. — 1838年の農村自治体条例は村長 (Gemeindevorstand) の任期を6年と定めた。Kuntze, S. 76—79; Kötzsche 1953, S. 101; Blaschke 1962, S. 38; Schmidt 1966, S. 146—147.

(12) 倉庫フーフエについては後註 (16)、フーフエについては松尾 1979c, 189—190 ページ、参照。

(13) 後註 (14) のショック税は19世紀になっても、納税者の自己査定に基づいて1628年に作成された租税台帳 (Steuerkataster) を基準に課税された。もちろん、ショック数で表現される保有地価格は、さまざまに修正された。その結果として次の区分が生じたのである。(i) 完全 (voll) ショック。1628年の租税台帳に記載されている課税ショック。(ii) 現行 (gangbar) ショック。現実に課税されているショック。(iii) 軽減 (ermäßigt oder moderiert) ショック。不幸などのために軽減を許されたショック。(iv) 免除 (dekrement) ショック。不特定の期間について課税を免除されたショック。(v) 無効 (kaduk) ショック。荒廃してしまった土地のショック。(vi) 不足 (fehlend) ショック。1628年の租税台帳には記載されているが、現実には存在しないショック。Römer 1788, S. 568—569; Steuern 1858 a, S. 3; Behrendts, S. 18.

20, 30 und mehr Scheffel betragen haben.  
/Bl. 9b/

2) müssen wir den Flachs stauchen und aufheben in ungemessenen Tagen, auch überdies noch jeder Behufte oder Begüterte 10 Tage lang, also 90 Tage sage Neunzig Tage in Summa unentgeltlich solchen brechen.

Wegen diesen Flachsdiensten haben wir schon einmals, da der Flachsbau ganz übertrieben wurde, über Zehn Jahr Proceß gehabt, welches uns 96 Tlr - - Kosten verursachte, und erst heuer im Jahre 1830 da wir arm sind und kein Geld mehr dazu haben, uns dahin vergleichen mußten, noch

225 Tlr - -

als eine Entschädigung zu leisten und die Tage sind dennoch ungemeßen verblieben.

wir bitten allerunter-

/Bl. 10/ thänigst,

diese Arbeitstage nicht nur auf eine gemeßene Zahl zu bestimmen, sondern auch um ein beträchtliches gegen zeither zu vermindern, damit wir auch als treue Unterthanen künftig bestehen können, und die Königl. Abgaben zu entrichten fähig bleiben.

F) wir müssen also jeder 10 Tage den erbauten Herrschaftl. Flachs in deren Brechhaus ausbrechen.

G) jeder zwey Hecheltage an diesen Flachs verrichten.

H) jeder Behufter alljährlich einen Schaafscheer-Tag thun.

I) jeder muß ein Stück grobes oder werknes Garn spinnen, davor erhält er zwar - 3 Gr - Lohn, wenn er es aber nicht spinnt, muß er drey Groschen bezahlen,

K) alljährlich haben wir 4 Tlr 12 Gr

/Bl. 10b/ - sogenannte Walpurg- oder Michaeliszinnsen noch überdies ans Rentamt zu bezahlen.

L) alljährlich müssen wir 4 Tlr 20 Gr - sogenanntes Schindel-aufgeld ebenfalls dahin entrichten.

M) sind wir auch noch mit dem harten Zwang schlechterdings in der sonst Herrschaftl. itzt aber Eigenthums-Mühle zu Neuhäusern an den Flöhstrom gelegen unser nöthig Back- und Brod-

ル,あるいはそれ以上である。

- (2) 我々は、不確定の日〔数〕で亜麻を堆積し、拾い集めねばならず、その上にフーフエ農あるいは土地保有者は各人10日間、したがって合計90日間、無償で亜麻の皮を剥がねばならない。

この亜麻賦役に関して、亜麻栽培が度を越したので、我々はすでに一度10年以上も訴訟を行なった。これ〔訴訟〕は我々にとって96Tlr—の費用を要したが、我々は貧乏で、そのための資金がないので、当1830年に和解し、225Tlr—を補償として支払わねばならなかった。しかしながら、この賦役は不確定〔賦役〕のままである。

我々が将来も忠実な領民としてやって行き、国王への公課を支払いうるように、我は、これらの労働賦役の確定〔日〕数を定めるのみならず、また、従来より〔賦役を〕著しく引き下げるよう……請願する。

- (F) 我々は各人10日間、亜麻皮剥ぎ小屋で、収穫された領主の亜麻の皮を剥がねばならない。
- (G) 各人はこの亜麻について2日間、亜麻抜き賦役を果たす〔べきである〕。
- (H) 各フーフエ農は毎年1日の羊剪毛賦役を果たす〔べきである〕。
- (I) 各人は1シュテュック<sup>37</sup>の粗質麻糸あるいは麻屑糸を紡がねばならない。それに対して彼は—3Gr—の賃金を得る。紡がない場合、彼は—3Gr—を支払わねばならない。
- (K) 我々は毎年なおその上に4Tlr 12Gr—のいわゆるヴァルブルギス賃租あるいはミヒャエーリス賃租を出納局に支払わねばならない。
- (L) 我々は毎年4Tlr 20Gr—のいわゆる屋根板割増金<sup>40</sup>をも支払わねばならない。
- (M) 我々はまた、ノイハウゼンのフレーア川畔にある、かつては領主のものであったが、今では〔粉屋の〕所有となっている水車で、必要なパン穀物を必ず製粉させるという

- 
- (14) ショック税 (Schocksteuer) は一種の地租であり、従来のラント税 (Landsteuer) と、プフェニヒ税 (Pfennigsteuer) とが1763年に統合されたものである。先行の2種の租税と同じくショック税においても、地価がショック・グロッシェン (Schockgroschen = 60 Gr) で評価された。その税率は1812—30年に1ショックの土地に対して農村で58 Pf, 都市では18 Pfであった。Römer 1788, S. 570—571; Steuern 1858 a, S. 3—5; Behrendts, S. 17—18。——ショック税は1843年9月9日の地租改正法により廃止され、新しい地租が導入された。Gesetzsammlung 1843, S. 98。
- (15) 四季税 (Quatembersteuer) は、1646年に人税 (Personensteuer) と営業税との混合税として導入され、毎月徴収された人頭税 (Hauptgeld) が、1653年から年4回の徴収に変更されたために、そのように呼ばれるようになったものである。その1期分の税額は四季税1単位 (ein Quatember oder ein einfacher Quatember) と呼

treide mahlen zu laßen,

hart belastet. Thun wir solches nicht, wie es öfters um beßer zu kommen, geschehen, daß wir an einen andern Ort und Mühle mahlen, die uns obgleich nicht näher, doch öfters weit convenabler ist, so sollen wir auch noch dem Müller zu Neuhausen von jeden Scheffel, den wir anderwärts mahlen laßen, das sogenannte Metz- oder Mahlgeld

/Bl. 11/ noch besonders bezahlen.

Dieser ungebührliche Zwang, er stamme woher er auch wolle, ist doch wirklich zu hart, wenn treue Unterthanen auch das, was sie zu ihrer Nahrung, nämlich das Brod, nicht entbehren können, auch nochmals an einen Eigenthumsmüller, der nichts daran gethan oder arbeiten laßen bezahlen sollen !

Um diesen Mißbrauch ganzlich abzustellen, so wie auch um beträchtliche Minderung aller derer sub F, G, H, I, K und L angezeigten Sätze, bitten wir in aller Unterthänigkeit.

N) Ob wir gleich, schon wie ad 5 gesagt ist, mit dem Straßen bauen nach Einsiedel etc. so wie andre Communen alles leisten

/Bl. 11b/ müssen, müssen wir auch noch ans Rentamt zu Freyberg alljährlich 4 Tlr - 3 Pf zum Starßenbau entrichten, und doch sind wir Nirgends Geleits frey !

wir bitten auch hier allersubmissesst um Erlaß oder doch Moderation.

O) unsre Kinder müssen wir nach Neuhausen zur Schule schicken, für Kinder ist solches immer eine halbe Stunde Weges zu rechnen, welcher über eine hohe Anhöhe dahin führt. Wenn nun die bey uns lange Winterzeit, wo es öfters gefährlich ist, daß Erwachsene zu Fuß kaum fortkommen können hereingetreten, und wir sollen nach E. hohen Consistorial ergangnen Schulbefehl unsre Kinder, sowie selbige das fünfte Jahr zurückgelegt haben, auf so gefährvollen Wegen dahin schicken, oder

/Bl. 12/ doch wenigstens dem Schullehrer oder Cantor das Schulgeld bezahlen, auch wenn ein oder das andre Kind erkrankt ist, wird keine Rücksicht darauf genommen. Bleiben Reste, werden solche an Gerichtsstelle übergeben, und der Arme hat Kosten, Strafe auch wohl Gefängniß, und zu Hauße — doch

厳しい強制に非常に苦しめられている。我々がこれをしないで、自分のためになるように、近くにあるわけではないが、しばしばはるかに好都合な、余所の水車で製粉する場合でさえも、我々はノイハウゼンの粉屋に、我々が余所で製粉した〔穀物〕1 Schf について、いわゆるメツェ金あるいは製粉金を特別に支払わねばならない。忠実な領民が生計すなわちパンのために欠かえないもの〔についてメツェ金〕を、何もしなかった、〔かつての領主の水車の〕所有者たる粉屋に支払うべきである、というこの不当な強制は、それが何に由来するとしても、現実には厳しすぎる。

我々はこの悪習の完全な是正を、また、先述〔II—〕(F), (G), (H), (I), (K)および(L)のすべてについて著しい引下げを……請願する。

(N) 我々は、すでに〔I—〕(5)で述べたように、〔ドイッチュ・〕アインジーデルなどに通じる道路の建設について他の共同体と同じく、すべてをなさねばならないけれども、その上に毎年4 Tlr—3 Pf をフライベルクの出納局に道路建設のために支払わねばならない。<sup>(41)</sup>しかしながら、我々は護送税を全く免除されていないのである。我々はここでも免除あるいは軽減<sup>(42)</sup>を……請願する。

(O) 我々は子供たちをノイハウゼンの学校に行かせねばならず、これ〔通学〕は子供たちにとっては、高い丘を越えてゆく道路で、いつも半時間かかる。当地では冬期が長く、その時は大人でさえ徒歩で出るのはしばしば危険であるが、その冬がやって来た場合〔にも〕、我々は、……宗務局の学校令<sup>(43)</sup>に従って5才を過ぎた子供たちを、これほど危険な道路で〔学校に〕行かせねばならない。あるいは、少なくとも学校教師あるいは聖歌隊指揮者に授業料を支払わねばならず、これは、子供が病気になった時でも考慮されない。滞納金があると、それは裁判所に委ねられ、その貧民は費用を支払う〔べきであり〕、罰金を、禁固刑さえ科される。しかも、家には病気の子供がいるの

---

ばれた。しかし、1660年に、四季税1単位の総額(全国で約22,000 Tlr)が各都市・村落に割り当てられたので、都市・村落当局は税收確保のために再びそれを主として土地所有者に割り当てた。こうして四季税は営業税と地租の混合税となったのである。1812—30年には都市で19 $\frac{1}{2}$ 単位が、農村では49単位が徴収された。Römer 1788, S. 578—579; Steuern 1858 a, S. 4—5; Behrendts, S. 15—16, 18. —営業税としての四季税は1834年に廃止されて、営業税(Gewerbesteuer)と人税(Personalsteuer)に代わった。Reinhardt, S. 305. 地租としての四季税は1843年9月9日の地租改正法により新しい地租(Grundsteuer)に代わった。Gesetzsammlung 1843, S. 98.

(16) 倉庫メツェ(Magazinmetze)あるいは、〔軍用〕倉庫〔への穀物〕給付(Magazinlieferung)は1682年(?)に導入された一種の地租である。この租税(1776

ein krankes Kind ! —

Was kann man wohl für Lehrbegierde von ein fünfjährig Kind verlangen, das öfters nur noch lallt, statt spricht ? Es stört die andern ein Unterricht, verunreiniget auch wohl die Stube des Lehrers, es wird ein Gelächter von andern Knaben und Mädchen, und die Schustunden sind gestört.

Wäre unsers allerunterthänigsten unmaaßgeblichen Erachtens es nicht angemessner, und für diese ganz kleinen Kinder /Bl. 12b/ geeigneter, wenn solche erst nach zurückgelegten Sechsten Jahre, und bey gewissen Umständen auch später zur Schule gebracht wurden ? — In unsrer rauhen oft ungestümen Gebirgsgegend, die wir nur allzugut empfinden, dürfte es beßer seyn, in den niedern oder wärmern Lande macht es großen Unterschied gegen uns.

wir bitten dahero um diesen 6. Jahres Anfang der Schule, bis dahin um Erlaß des Schulgeldbezahlens als auch bey Krankheit der Kinder allerunterthänigst.

In Betreff unsrer Hhäußler und Hausgenossen ist ebenfalls noch allerunterthänigst vorzutragen, daß selbige

- 1) jeder drey Flachsbrechtage,
- 2) jeder einen Hecheltag.
- 3) jeder Eilf Stück flächsenes Garn alljährlich, wo er für

das

/Bl. 13/ Stück - 3 Gr - Spinngeld erhält, wenn er es aber nicht spinnt, für jedes fehlende Stück - 3 Gr - bezahlen, und ans Rentamt berichtigen muß.

- 4) jeder muß einen Tag Schaafe scheeren.

5) jeden sind die Handdienste an Leinacker abräumen, Flachs aufstauchen und aufheben, ungemessen und hängt von der Willkühr des Oeconomie-Pachters ab.

6) müssen sämtliche Hhäußler alhier alles auf den herrschaftlichen Vorwerk zu Heidersdorf (eigentlich Lehngericht) erbaute Getreide austreschen, wofür selbige nur den dreyzehnten Schefel zum Lohn erhalten, und wenn selbige in einer Woche, wo sie die Reihe dazu trifft, nicht selbst verrichten, muß der Erman gelnde auf diese Woche

である。

〔他方で、〕はつきりは話せず、しばしば舌足らずの口をきくだけの5才の子供から、どのような教育への欲求が要求されるか。その〔子供〕は他の〔子供の〕授業を邪魔し、教師の部屋を汚し、他の少年少女の物笑いの種になって、授業は妨害される。<sup>(44)</sup>

我々の……考えでは、満6才以後にはじめて、事情によっては一層遅くから学校に行かせるのが、小さな子供にとって適当ではなかろうか。当地は山地で、〔氣候が〕厳しく、しばしば激烈であり、それを我々は大変良いと感じているが、ここではそれが良いであろう。低地のあるいは温暖な地方と我々〔の地方〕とでは差異が大きいのである。

そこで我々は6才からの通学開始と、それまでの、また子供の病気の際の授業料支払の免除を……請願する。

〔Z〕我々〔当村〕の小屋住農と借家人に関して上申すべきは以下のことである。すなわち、

- (1) 彼ら各人は3日の亜麻皮剥ぎ賦役〔を果たさねばならない〕。
- (2) 各人は1日の亜麻扱き賦役〔を果たさねばならない〕。
- (3) 各人は毎年11シュテュックの麻糸〔を紡がねばならない〕。それに対して彼はシュテュック当り—3 Gr—の紡糸金を得る。紡がない場合、彼はシュテュック当り—3 Gr—を出納局に支払わねばならない。
- (4) 各人は1日ずつ羊の剪毛をせねばならない。
- (5) 各人には、亜麻畑で清掃し、亜麻を堆積し、拾い集めるという手賦役〔が課される。これは〕不確定〔賦役〕であって、農場借地人の恣意に依存する。<sup>(45)</sup>
- (6) 当地のすべての借家人は、ハイダースドルフにあり、元来は永代村長の土地であった領主の分農場で栽培されるすべての穀物を打穀せねばならない。それに対して彼らは $\frac{1}{3}$ のSchf〔の穀物〕を賃金として得るだけである。順番でそれ〔打穀〕に当たった週に、自身で〔それを〕果たさない場合、出頭しなかった者は1週当り—8 Gr—を〔農

---

年以後は1フーフエにつき2Mtzのライ麦と2Mtzの燕麦)は、耕作されているフーフエから納付されねばならないので、このフーフエは倉庫フーフエと呼ばれる。軍用倉庫の1つはフライベルクにあった。Römer 1788, S. 255, 577; Steuern 1858a, S. 5; Behrendts, S. 19; Kötzschke 1953, S. 133. これは1830年5月11日の法律により、義務者の選択により貨幣での納付も可能となった。Gesetzsammlung 1830, S. 50. —1837年12月7日の法律により、軍用穀物給付は存続するけれども、それに対して、市場価格に基づく補償が陸軍金庫(Kriegscasse)から支払われるこ

/Bl. 13b/                    - 8 Gr -  
dem Pächter dafür erlegen.

Das Bewandniß damit erklärt sich dadurch: daß nur mit den 13. Scheffel kein Drescher besten kann, folglich ein schlecht Wochenlohn macht.

Hat er nun die Reihewoche und nicht Zeit dazu, so hat er - 8 Gr - als Aufgeld oder Zuschuß für einen andern an seine Stelle gestellten Drescher zu erlegen, nachdem die Getraidepreise sind.

7) Haben die Häußler eben so wie die Behuften bey den Herrschaftl. Jagden auf jedesmaliges Erfordern das Wildpret herbei zu treiben; so wie auch

8) nicht nur die Königl. sondern auch die Herrschaftl. Wildpretsführen unentgeltlich zu verrichten.

Um deren Verminderung, wo nicht möglicher gänzlicher

/Bl. 14/                    Befreiung in aller Unterthänigkeit gebeten wird, da keiner derselben, ob sich zwar ein Jeder bis itzt dem ihm zugetheilten Quante Dienste unterzogen und solche willig, oft über seine Kräfte geleistet hat, es in der Zukunft unter obigen Verhältnißen auszuhalten fähig seyn möchte.

wir bitten nochmals um allerhöchsten Erlaß.

Nun wäre noch allerunterthänigst nachzutragen.

P) mit dem Herrschaftl. Schaafvieh haben wir leider dasselbe Verhältniß, wie alle andre Ortschaften der Rittergüther Purschenstein und Sayda; wir müssen unsre hochbesteuerten Fluren an Feldern und Wiesen mit ungeheuern Heerden dergleichen Vieh ver- und aushüten las-

/Bl. 14b/                    sen, indem seit mehrern Jahren bey dem gestiegenen Wollpreißen die Oeconomie-Pächter ihren sonst beträchtlichen Rindviehbestand soweit reduciret haben, daß sie nur soviel Kühe hielten, als in den Haushalt zur höchsten Noth erforderlich war, dagegen den Schaafbestand außerordentlich vermehrten, so daß deren Zahl 2000 bis 2500 Stück und mehr, besonders in den Jahren 1824 bis zu 1830 angewachsen war.

Nun müssen wir nicht allein diese herrschaftliche in obiger Zahl angeborne Schaafheerde, auf allen unsern Fluren erhalten,

場) 借地人に支払わねばならない。

その事情は以下によって説明される。すなわち、打殺人は<sup>47</sup> 6 だけの Schf [の穀物賃金] ではやって行くことができない。したがって、[打殺人取分は]<sup>48</sup> 劣悪な週賃金である。[そのために、] ある週に順番で当ったが、そのための時間 [の余裕] を持たぬ者は、彼の代りに決められた打殺人のために—8 Gr—を割増金あるいは追加金として、穀物価格 [の上下] に従って支払わねばならない [というわけである]。

(7) 借家人は<sup>49</sup> フーフェ農と同じく、領主の特獵の際は要求される度に、野獸を狩り立てねばならない。

(8) [彼らは]<sup>50</sup> 国王の獵獸ばかりでなく、領主の獵獸をも無償で運搬せねばならない。

[以上の手賦役について] 完全な免除が可能でない場合には、引下げを [我々は請願する]。なぜなら、各人が現在まで、割り当てられた量の賦役に服し、それを喜んで、しばしば能力以上に果たしてきたとしても、誰もが上記の事情の下で将来はこれに耐ええないからである。

我々はお上による免除を今1度請願する。

ところで、なお……追加すべきことがある。

(P) 領主の羊について残念ながら我々は、騎士領ブルシェンシュタイン=ザイダに属する他のすべての集落と同一の事情にある。すなわち、我々は、<sup>51</sup> 重く課税される我々の土地、つまり耕圃と採草地に、[領主の] 羊の大群を放牧させてやらねばならない。羊毛価格が上昇したために農場借地人は数年来、かつては大きかった牛の総数を減らして、家計に必要なだけの牝牛しか飼養せず、反対に、羊総数を異常に増大させた。そこで、その数はとくに1824—30年には2,000—2,500頭あるいはそれ以上に増加した。

ところで、我々は我々のすべての土地で、これらの、上に数を挙げた領主の羊群の

---

とになった。Gesetzsammlung 1837, S. 142—143, 162.

(17) Begüterter とは、農民地の保有者を指す。

(18) 借家人は土地も家屋も保有しない。耕作する借家人とは、小地片を借地して耕作する借家人のことであろう。

(19) アインジューデルはケムニツ市の近くの村である。Blaschke 1957, S. 283; Blaschke 1965b, S. 86. しかし、ここではドイッチュ・アインジューデル (Deutsch-Einsiedel) 村を指す。この村はフライベルク特別管区の南端、ボヘミアとの国境にあったからである。1834年に51戸、人口391人であった。Schumann, Bd. 1, S. 622; Schumann, Bd. 18, S. 853; Schiffner, S. 601—602; Blaschke 1957, S. 302. その標高は700mである。

(20) 国道建設賦役 (Landstraßenbaudienste) は1766年に領民に対して規定された。

sondern auch die des Schaafmeisters, der nach gesamleter Kenntniß auf den 10ten Theil des Ertrags als auch eben so auf Zuschuß gesetzt seyn soll.

Nimmt man also nur die

/Bl. 15/ herrschaftl. Schaafzahl 2000 Stück an, so hat der Schaafmeister auch noch 200 Stück dabey.

Hierzu kommt nun noch die Zahl

- a) des Meisterknechts Vieh, der die Mutterschaafe hütet,
- b) der Hammelknecht mit Hammel und Zuchtstöhre,
- c) der Zeitvieh-Knecht, Schaafe, die noch nicht zur Zuzucht gelangen sollen,
- d) der Lämmer-Knecht mit 3-500 Stück Lämmer,
- e) der Märzvieh- oder Prackknecht und
- f) die Zutreiber, wenigstens zwey bey a und b befindlich.

Keiner dieser 6 bis 7 Schaafknechte oder Hirten hat ein bestimmtes baares Geldlohn, sondern statt deßen nach Verhältniß des Dienstes zu 20, 30, 50 bis 100 Stück Schaafe unter den herrschaftl. Schaa-

/Bl. 15b/ fen, doch jeder seinen antheiligen Einwurf der Schaafe unter seiner eignen Heerde, um sie, da er sich solche besonders angewöhnt, auf die besten Weideplätze zu unsern Nachtheil nagen läßt.

Hierdurch wächst diese Heerdenzahl immer sehr beträchtlich an und wer ernährt sie, oder vielmehr, wer giebt das Schaafknecht-Lohn ?

Nur wir armen Unterthanen. Nach dem im Jahr 1737 allerhöchst confirmirten Erbregerregister heißt es nur

die Herrschaftlichen Küchen-schaafe !

wo zwar keine Anzahl benannt ist, und welche doch gewiß nicht über 3 bis 400 Stück zum Küchen-Verbrauch, Stamm und Fortzucht zu rechnen seyn dürften.

Wie kommen also wir, die wir unsre Grundstücke gehörig

/Bl. 16/ in allen Caßen versteuern müssen, dazu auch noch soviel Herrschaftliche Lasten aller Art wie wir bereits vorstehend sub A bis O als auch unsere Häusler und Hausgenossen von No. 1 bis mit 8 zu tragen haben, daß wir noch solche wol-

みならず、牧羊親方<sup>52</sup>のそれをも飼養せねばならない。そして、調査によれば牧羊親方は収益についても追加金についても<sup>53</sup>に定められている。そこで、領主の羊数を2,000頭だけと考えると、牧羊親方がなお200頭をそこに持つ。

それにさらに、(a)母羊を番する親方牧者の羊の数が加わる。(b)去勢羊と種雄羊を番する去勢羊牧者、(c)種畜にされない羊〔を番する〕成羊(?)牧者、(d)300—500頭の子羊を番する子羊牧者、(e)若羊(?)牧者、(f)上の(a)と(b)の下に少なくとも2人いる追子〔もそれぞれの羊を持っている〕。

これら6—7人の羊牧者あるいは牧人の中の誰も一定の賃金を現金で受けなくて、その代りに各人は職務に応じて20, 30, 50ないし100頭の羊を領主の羊〔群〕の中に持つ。すなわち、各人は彼自身の〔番する〕羊群の中に、持分により入れた羊を持つのである。そして彼らは、これが慣習となっていることであるが、我々に不利益にも〔我我の〕最良の放牧地で〔羊に草を〕噛み取らせる。それによってこの群の数はますます増加するが、誰がこれ〔羊群〕を養うのか。あるいは、誰が羊牧者の賃金を支払うのか。我々貧乏な領民のみ。

1737年にお上によって確認された世襲台帳<sup>53</sup>においては、領主の台所用羊だけが述べられている。そこには数は定められていないが、台所での利用と継続的飼育のため〔の羊数は〕300—400頭以上と評価されてはならない。したがって、我々の土地からすべての〔国家〕金庫に十分に納税せねばならず、その上に既述のように〔II—〕(A)から(O)までの、我々の小屋住農と借家人は〔II—Z—〕(1)から(8)までの、あらゆる種類の領主的負担をも負担すべき我々が、雲のように夥しい羊群を、雪がようやく薄くなる早

---

フーフエ農が年に畜賦役1.5日、園地農・小屋住農が手賦役1.5日であった。これを代納金(Surrogatgeld)で代替することも可能であった。1817年からは舗道建設(Chausseebau)のための賦役も賦課された。これらの道路建設賦役は1832年償却法によって償却可能とされた。Pätzold, S. 89, 98, 104. また、1781年4月28日の法律は道路の建設と維持を次のものの義務と定めた。(i) 市内および都市領域内では市参事会。(ii) 村落の垣の内では村落共同体。(iii) 以上の地域以外の国道および通商路については国庫あるいは、護送税、道路税、橋税を徴収する領主・市参事会。(iv) 連絡路についてはそれぞれの共同体。Codex 1806, Sp. 675—676. Vgl. Römer 1788, S. 808; Pätzold, S. 84—85.

- (21) この村については、その請願書を紹介する際にふれる。同村の請願書の日付は、本請願書より10日遅い10月21日である。しかし、それは署名提出前にすでに回覧されていたのであろう。
- (22) ピルスドルフ(Pilsdorf)村(海拔655m)の1834年の人口は99人(14戸)であつ

kenreiche Schaafheerden von ersten Frühlingstagen an, wo sich der Schnee nur erst in Scheiben formt, bis zum todtten Spätherbst, auf unsre Grundstücke sollen füttern und diese geraume Zeit über sättigen ?

Wir können nicht so wie in Nieder oder fetten Lande unsre Fluren alljährlich mit Früchte aller und der besten Arten besäen, wo selbige dennoch auch in diesen Gegenden nach 3 oder 4 Jahr in Ruhe als zum Kleebau oder Brache liegen müssen. Nein ! — wir müssen von der Düngung an ge-

/Bl. 16b/ rechnet nach fünf allerhöchstens gewonnenen Saaten unsre Felder dann wenigstens 6 auch mehrere Jahre in Ruhe liegen lassen, — um theils daß sie sich wieder erholen, theils daß wir während der Zeit auch das nöthige Heu- und Winterfutter darauf erbauen, da wir mit Wiesen nicht zu reichlich begabt sind, theils aber auch, um mit den Dünger auf unsre Fluren gleichförmig durchzukommen. Denn wir müssen in unsern Boden, der sehr kiesigt mager und oft ganz steinig ist, weit fetter oder düchter düngen als der Nieder- oder Fettländer, und brauchen bey uns wenigstens Sechzig Fuder guten Dünger, wo letztre nur Zwanzig Fuder halb in Stroh bestehenden Dünger nöthig haben.

Wenn wir nun im Frühjahre ein dergleichen sogenanntes Stück /Bl. 17/ Haferstoppel, bey uns Neuland genannt, liegen lassen oder zu Heufeld bestimmen, so wächst darauf zuerst als Grasbestockung deßelben einige wilde Kräuter oder Pflanzen, welche die Schaafe sehr lieben als Scabiosen, Schaafgarbe, Stiefmütterchen, wilder rother und weiser Klee, Teufels-Abbis, Saudistel, alte Hühner, Johannisblumen und wie man dergl.

Kräuter alle benennt, und allen andern Pflanzen und Gräsern vorziehen. Dieses den Schaafknechten wohl bewußt, anstatt diese Fluren nur auf der Trift zu überziehen, treiben sie 3 auch 4 mal hin, her und quer darauf, lassen Stock und Wurzel auf den Grund abnagen, und was noch nicht herausgerissen ist, wird durch die spitzen Schur der Schaafe in Abgrund getreten. Denn wo eine solche Wolke Schaafe nur

/Bl. 17b/ eine Stunde schwebt, schadet es mehr als

春から荒寥たる晩秋まで我々の土地で養い、この長い期間を通じて満腹させ〔ねばならない〕のはどうしてか。

我々は低地のあるいは肥沃な地方でのように、我々の土地にすべての、また最良の種類の作物を毎年播くことはできない。この地方ではそれ〔土地〕は3—4年〔の栽培〕の後にはクローヴァ栽培のために、あるいは休閑地として休まねばならない。否、我々は肥料から計算して、高々5回の播種の後、耕圃を少なくとも6年またはそれ以上休ませねばならない。それが再び〔地力を〕回復するために、また、我々が、採草地に乏しいので、必要な乾草と冬期飼料をその期間中そこで栽培するために、さらにまた、我々の耕圃に肥料を一様に間に合わせるために。なぜなら、我々は、我々の土地が瘦せており、砂利多く、しばしば石ばかりであるので、低地のあるいは肥沃な地方よりはるかに豊富にあるいは濃密に施肥せねばならず、後者が、半分は藁よりなる肥料を馬車20台分必要とするにすぎない場合に、我々は少なくとも馬車60台分の良質肥料を要するからである。

さて、我々が春に、当地では新地と呼ばれるいわゆる燕麦刈後地の1区画をそのままにしておく、あるいは、乾草畑に定めると、そこにはまず緑草として、羊の非常に好む若干の野生の草あるいは植物が生長する。それは、松虫草、西洋鋸草、三色堇、野生の白クローヴァと赤クローヴァ、悪魔の松虫草、野芥子、老鷄、ヨハネの花、などと呼ばれる草で、羊が他のすべての植物と草より好むものである。このことを羊牧者は十分知っており、彼らは、これらの耕圃を牧道としてのみ〔用いて羊を〕追い立てて行く代りに、ここで3回も4回も往復したり、横切ったりして〔羊を〕追い、地上の茎と根を噛み取らせる。そして、〔羊が〕抜き取らなかったものは、羊の鋭い蹄<sup>54</sup>のために奈落の底まで踏み付けられる。このような雲〔のように夥しい〕羊が1時間だ

---

た。Schumann, Bd. 8, S. 276; Schumann, Bd. 18, S. 468; Schiffner, S. 634; Blaschke 1957, S. 307.

- (23) この都市は有力な鉱山都市で、フライベルク特別管区的首邑でもある。Schlesinger, S. 99—106.
- (24) ここにあるべき動詞が、原文では脱落している。
- (25) フレーア (Flöha) 川は Zschopau 川→Freiberger Mulde 川→Mulde 川→エルベ川に合流する。
- (26) 糺問 Inquisitio (その独訳 Untersuchung) とは、立証を目的として司法機関によって行なわれる取調べである。Paterna, S. 287. 糺問の費用とは、糺問訴訟 (Inquisitionsprozeß) の費用を意味すると考えられる。糺問訴訟は刑事事件における訴訟手続の一つで、同一の司法機関が、嫌疑者に対するすべての訴訟手続を執行するもの

ein Hagelwetter, und der mühsame Wirth schaut mit thürnenden Augen denen in Ueberfluß gesättigten Heerden traurig nach.

Dieses allgemeine Landesübel ganz abzustellen, sey unser ganz unterthänigster doch auch innigster Vortrag.

Q) mit den sonstigen Hölzern, so wir von der Herrschaft jederzeit erhalten konnten, theils in Holzmärkten, jährlich zweymal gegen baare Zahlung auch sichre Personen auf kurzen Credit, eben so mit dem Schragenholz zur Feuerung, ist es itzt ganz und weit anders. —

Niemand erhält einen Spahe Holz ohne baar Geld, wenn er nicht ein besondrer Freund des Rentbeamten ist. Die Forst-Accidenczien wurden sonst separat bezahlt, die Herrschaftl. Forstbedienten

/Bl. 18/ hielten darum an, daß da sich dieses Einzelne als ein Biergeld täglich leicht verthun, — sie von der Herrschaft auf ein jährlich Fixo gesetzt, und ein gewöhnliches gleich mit zum Holze geschlagen und bezahlt werden möchte !

Dies geschah leider für alle ! Kaum vor hochadliche Resolution über Genehmigung des Vortrags erfolgt, als auch schon von Neuen Holzzeddelgeld, — Nummergeld — entstand, welches die Revierjäger, — jetzt soll man sie Förster tituliren, wer nicht anlaufen will, — an sich zu ziehen wissen.

Ueberdieß erdreusten sich diese Menschen so weit, von jeden angenommenen Stamm, Klotz auch Holz unter den nichtigen Vorwand des fliegenden Wurms, die Schaale herab schneiden zu laßen, um solche an den Lohstamper zu verjudeln und ihre Beutel

/Bl. 18b/ zum Biere zu schmücken.

Geschältes Holz hat weder Kraft noch Halt, und giebt keine Ofenhitze, wie aller Orten wohl bekannt ist.

Unsre Armen erhalten zwar noch jährlich ein Lesezeichen zu klaren abgefallnen Holz und Gestrüppe, welches ohnedies verkauft, oder im Walde verwesen muß. Allein zu welcher Zeit ? — und auf wie lange ? — und wenn sind sie davon etwas zu sammeln ganz unterbrochen ?

Im Fröhjahr geschieht es spät nach Bequemlichkeit des Revier-

けでも漂ったところでは、それ〔羊群〕は雹の嵐以上の害を及ぼし、苦勞する農業者は涙ぐんだ眼で、十分に満腹した〔羊〕群を悄然と見送るのである。

国家のこの一般的な禍を全く是正することが、我々の……最も熱烈な上申である。

- (Q) 我々が領主から一部は年2回の木材市場で現金払いにより、また、確かな人物は短期の信用で、常に手に入れることのできた、その他の木材、および燃料用の薪について、今では事情が全く変わった。

地代〔徴収所〕役人の特別の友人でなければ、誰も現金なしでは木端1つ手に入らないのである。森林〔役人〕の副収入はかつては別個に支払われた。領主の森林役人は、個々〔的収入〕ならば酒手として毎日すぐに浪費するので、領主が自分たちに年々の定額〔賃金〕を定めるよう、また、通常の〔酒手〕は木材〔の売価〕に付け加えられ、〔買い手によって〕支払われるよう要望した。

残念ながら、これはすべて〔の副収入〕に対して行なわれた。この〔森林役人の〕上申を承認する……決定がなされるや否や、木材伝票手数料〔番号手数料〕が新たに発生した。これを我がものにしたのは獵区番人である。〔彼らと〕衝突したくなければ、我々は今や彼らを山林官の称号で呼ばねばならないのである。

その上に、この人々は、受け取ったすべての樹木、丸太、木材から、虫が飛んでいくという、つまらぬ口実の下に樹皮を切り取らせて、これを皮鞣し樹皮末生産者に安く売り、<sup>(5)</sup>ピール〔代〕のために自分の財布を膨らませる。皮を剝がされた木材には、周知のように〔用材として〕力も強さもなく、それはまた炉〔で燃やしても〕熱を出さないのである。

さらに我々〔当村〕の貧民は毎年、落ちた小枝と下生えのために、これらはいずれにせよ、森の中で朽ち、あるいは、腐敗するものである〔にもかかわらず〕、取拾証を受け取る。しかしながら、〔それを受け取るのは〕どういう時にか。どれほどの期間についてか。いつ彼らはなにがしか〔の小枝と下生え〕の取拾を妨げられるか。これ〔取拾証交付〕は獵区番人の都合により春遅くに行なわれる。次いで、大物獵が始まり、

---

である。この場合、起訴人(Ankläger)と裁判官が同一人物である。Paterna, S. 288. —取調べ費用(Untersuchungskosten)あるいは刑事事件費(peinliche Kosten)については、1783年4月30日の法律により犯罪者自身あるいはその代理人が、それを支払えない場合には、領民は、彼らがその納付を義務付けられているかぎり、それを支払うべきである、と規定されていた。Codex 1805, Sp. 452. Vgl. Römer 1788, S. 395; Blaschke 1965 a, S. 271; Schmidt 1966, S. 285. —1855年8月11日の法律による家産裁判権の国家への移譲とともに、裁判領主あるいはその領

jägers, — dann heißt es die hohe Jagd geht an; ihr müßt vier Wochen aussetzen, im Herbst fällt wieder mittel- und kleine Jagd ein, so klingt es eben so. Was können sich wohl diese Armen für - 1 Gr - baare Zahlung excl. des noch zu bezahlenden Lesezeichen-gel-

/Bl. 19/ des : denn kein. Forstbedienter thut nichts umsonst : an den Jäger dafür nutzen ?

Nicht haben sie als einen zerrißenen Wambs oder Lumpen, und allenfalls noch Prügel von Jäger oder Heeger, wenn sie einen Ast mehr genommen, der nicht loos und dürre da gelegen hat.

Auf das Holzwesen nicht nur zu unserer, als auch um der Armen Fortkommen höhers Orts ein besonderes Augenmerk zu richten, dürfen wir in aller Unterthänigkeit zu zu erbitten nicht unterlaßen.

Uebrigens schließen wir uns auch aller der Bitten so alle Unterthanen des Landes allerunterthänigst erfliehen wollen, ohne alle Ausnahme in allen Punc-

/Bl. 19b/ ten und Clauseln an, und beharren in aller Ehrfurcht und tiefster Submission als

Dittersbach zum Ritterguth Purschenstein gehörig am 11. Octbr. 1830.

Carl Gottlieb Gehmlich

( und andere 18 Unterschriften )

それには4週間が定められる。秋には再び中物獵と小物獵<sup>60</sup>が始まるであろう。これらの貧民は、—1 Gr—の現金ばかりでなく、〔猟区〕番人にも取拾証手数料を支払って、何を利用できるというのか。—なぜなら、どの森林役人もタダでは何もしてくれないからである。—彼ら〔貧民〕は、千切れた胴着あるいはボロ以外に〔何も〕持っていない。そして、彼らは、枯れて落ちたものでない太枝を取った場合には、〔猟区〕番人あるいは山番から殴打〔されるのである〕。

我々の繁栄ばかりでなく、貧民の繁栄のためにも、お上で森林制度にとくに止目するよう我々は……請願<sup>57</sup>する。

その他の点では我々は、国内のすべての領民の……請願に例外なくすべての条項において賛同する。……

騎士領プルシェンシュタインに属するディッタースバハにて1830年10月11日

カルル・ゴットリーブ・ゲームリヒ

(他18人)

---

民にこれまで課されていた取調べ費用の負担義務は、国庫によって引き受けられた。Gesetzsammlung 1855, S. 149. また、1856年の刑事訴訟法は訴訟手続を糺問訴訟から起訴訴訟(Anklageprozeß)に転換した。Schmidt 1966, S. 313. 起訴訴訟とは、刑事事件における訴訟手続の一つで、この場合、検事局の捜査活動と裁判所の取調べとが分離している。Feisenberger, S. 194—195.

(27) ザイフェン(Seiffen)村(海拔650m)の人口は1834年に1,000人(120戸)であった。木製品生産で著名である。Schumann, Bd. 11, S. 70—75; Schumann, Bd. 18, S. 758; Schiffner, S. 639—640; Blaschke 1957, S. 309; Blaschke 1965b, S. 290.

(28) 管区領民とは、管区村落(後註(29))の住民を指す。

(29) 管区村落(Amtdorf)は、土地・裁判領主としての領邦君主に所属し、管区の直接的支配の下にある村落である。Blaschke 1957, S. XI; Blaschke 1965a, S. 250.

(30) 1547年に設置された本領統治局は、本領地域のいわゆる司法・警察(=行政)・封事項(Justiz-, Polizei- und Lehnssache)に関する中央官庁である。立憲制への移行と中央官庁の編成替にともなって1831年に本領統治局は廃止され、その主たる権限は新設の法務省・内務省に移った。上級裁判所としての権限は本領司法委員会(Landesjustizkollegium)に、1835年からは最高裁判所に移された。そして、残りの権限は本領統治部(Landesdirektion)に、1835年からは県統治部に移された。Römer 1788, S. 104—105; Kuntze, S. 6—7; Blaschke 1953, S. 270, 283; Blaschke 1962, S. 7; Schmidt 1966, S. 30, 214, 220, 255—256, 261, 303—304.

(31) 後に紹介するザイダ市の請願書〔II—〕(1)においては、この1814年に当所領内で殺人事件が発生した、とされている。それ以後、糺問の費用が加重されたと、ここで

- 訴えられているのであろうか。
- (32) 賦役は1832年償却法によって、一方の当事者の提議による償却が認められた。Bär, S. 16—18; Kötzsche 1953, S. 142; Groß, S. 105—106.
- (33) 貨幣貢租は1832年償却法によっては、両当事者の合意に基づいてのみ償却されたが、1851年補充法は一方の当事者の提議による貨幣貢租の償却を認めた。Judeich, S. 66—67; Bär, S. 16, 29; Groß, S. 120.
- (34) 「乾燥した賃租」は穀物賃租を意味するのであろうか。なお、現物貢租は1832年償却法によって、一方の当事者の提議による償却が可能となった。Bär, S. 19.
- (35) 耕地の面積単位1シェッフェルは本来、1Schfのライ麦が播種される土地の面積を指し、しばしばキッカーである。なお、1869年には1Acker = 55.3423aと換算された。Haun, S. 20; Kötzsche 1953, S. 159—160; Lütge, S. 53—54.
- (36) 賦役に関する紛争を調停すべき賦役問題法原則は、「九月騒乱」直前の1830年8月13日に公布されていた。松尾1973, 132ページ註(2)。
- (37) 織糸の単位シュテュックについては、松尾1979a, 60ページ註(6)。
- (38) これらの賃租は、ヴァルブルギス(5月1日)あるいはミヒャエーリス(9月29日)に納付されるために、このように名付けられたのであろう。
- (39) 出納局については「初めに」註(18)。ただし、ここでは騎士領プルシェンシュタインの地代徴収所を指すであろう。
- (40) 屋根板割増金とは、屋根板による現物貢租が貨幣給付に転化されたものであろうか。
- (41) 道路建設賦役代納金については前註(20)参照。
- (42) ここでは免除・軽減の対象が明確でない。フライベルク出納局への道路建設金が対象であるならば、それは(I)において請願されるべきであろう。これが(II)に置かれていることから見れば、領主の護送税が問題にされているのかもしれない。
- (43) この学校令が何であるか不明であるが、この苦情に関連する規定は、1805年3月4日の法律に含まれている。すなわち、子供は満5才から14才まで連続して通学する。その村に学校がなく、指定された学校が半時間以上離れているか、または、道路が悪い場合のみ、通学開始は満6才まで延期される。両親などの保護者は、子供が登校したか欠席したかに関係なく、授業料を授業料徴収人に毎週毎週支払う。授業料徴収人は未納金について四半期毎に裁判領主に報告する。裁判領主は未納金の支払を滞納者に命令し、次いで強制執行を行なう。Codex 1824, S. 58—59, 61—62。——1835年6月6日の法律は国民学校を創設し、自治体が学校の建設・維持費と教師の俸給を負担する、と規定した。Schmidt 1966, S. 164—165。Vgl. Kötzsche 1931, S. 33; Blaschke 1954, S. 103。同法はまた、5才9ヶ月ないし6才3ヶ月の児童の通学開始を定めた。Gesetzsammlung 1835, S. 283。したがって、この項目は(I)において請願されるべきものであろう。
- (44) 原文をわたくしはSchustundenとしか読むことができないが、Schulstundenと解する。
- (45) この村については、その請願書を紹介する際にふれる。
- (46) Lehngerichtについては前註(11)参照。
- (47) 原文をわたくしはbestenとしか読むことができないが、bestehenと解する。

- (48) 打穀に対する反対給付, 打穀人取分 (Drescheranteil) はリュトゲによれば, 中部ドイツで14ないし17分の1であり, 時には20ないし26分の1にすぎなかった。Lütge, S. 129.
- (49) Behufter とは, 農民フーフエの保有者を指す。
- (50) 領邦君主に対する管区領民の狩猟賦役は1833年9月3日の法律により停止された。Groß, S. 113. もちろん, この規定は当村住民には適用されない。
- (51) 放牧権は1832年償却法により, 一方の当事者の提議による償却が可能となった。Bär, S. 19—20; Kötzsche 1953, S. 143; Groß, S. 107.
- (52) 牧羊親方については松尾1972, 7—8ページ。
- (53) 16世紀中葉を中心として領邦君主によって管区台帳 (Amts- oder Erbbuch) が数多く作成され, 管区内の各村落についてそれぞれの保有地の土地負担などが記載された。これにならって騎士領においても世襲台帳 (Erbregister) が, 騎士領の売却あるいは賃貸の際に作成され, 保有者名, その保有地の大きさと土地負担などが記載された。世襲台帳は, 本領統治局に承認されると法的正当性を獲得し, 訴訟において証拠となった。Wuttke 1893, S. 24—27, 30; Wuttke 1903, S. 177—178; Kötzsche 1953, S. 27—29, 33, 123; Pannach, S. 221.
- (54) 原文をわたくしは Schur としか読むことができないが, Huf と解する。ヤコバイトはこれを Schuhe と見なしている。Jacobbeit, S. 141.
- (55) 原文をわたくしは verjudeln としか読むことができないが, verjubeln と解する。
- (56) 狩猟対象による区分については「初めに」の註 (25)。
- (57) 原文をわたくしは zu zu erbitten としか読むことができないが, zu erbitten と解する。

[引用文献]

- Bär, E. F., *Die Ablösungsgesetzgebung im Königreich Sachsen bis 1889*. Zwickau 1892.
- Behrendts, Wilhelm, *Reformbestrebungen in Kursachsen im Zeitalter der französischen Revolution*. Leipzig 1914.
- Bekanntmachung = Bekanntmachung (Die zu Aufrechthaltung der öffentlichen Ruhe allerhöchst verordnete Commission). In: *Leipziger Zeitung*. 1830, No. 271 vom 12. November.

- Blaschke 1953 = Karlheinz Blaschke, "Die kursächsische Landesregierung." In: *Forschungen aus mitteldeutschen Archiven*. Berlin 1953. (Festschrift für Hellmut Kretzschmar)
- Blaschke 1954 = Karlheinz Blaschke, "Die Ausbreitung des Staates in Sachsen und der Ausbau seiner räumlichen Verwaltungsbezirke." In: *Blätter für deutsche Landesgeschichte*. Bd. 91. 1954.
- Blaschke 1955 = Karlheinz Blaschke, "Das Bauernlegen in Sachsen." In: *Vierteljahrsschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*. Bd. 42. 1955.
- Blaschke 1956 = Karlheinz Blaschke, "Zur Behördenkunde der kursächsischen Lokalverwaltung." In: *Archivar und Historiker*. Berlin 1956. (Festschrift für Heinrich Otto Meisner)
- Blaschke 1957 = Karlheinz Blaschke (Hrsg.), *Historisches Ortsverzeichnis von Sachsen*. Leipzig 1957.
- Blaschke 1962 = Karlheinz Blaschke, *Verwaltungsgeschichte für Stadt- und Kreisarchivare im Gebiet des ehemaligen Landes Sachsen*. Dresden 1962.
- Blaschke 1965a = Karlheinz Blaschke, "Grundzüge und Probleme einer sächsischen Agrarverfassungsgeschichte." In: *Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte. Germanistische Abteilung*. Bd. 82. 1965.
- Blaschke 1965b = Karlheinz Blaschke, "Einsiedel" und "Purschenstein." In: Walter Schlesinger (Hrsg.), *Sachsen*. Stuttgart 1965. (Handbuch der historischen Stätten Deutschlands. Bd. 8)
- Böttiger, Carl Wilhelm, *Geschichte des Kurstaates und Königreiches Sachsen*. Bd. 2. Hamburg 1831.
- Codex 1805 = *Codex Augusteus*. II. Fortsetzung. 1. Abtheilung. Leipzig 1805.
- Codex 1806 = *Codex Augusteus*. II. Fortsetzung. 2. Abtheilung. Leipzig 1806.
- Codex 1824 = *Codex Augusteus*. III. Fortsetzung. 1. Abtheilung. Dresden 1824.
- Deutschland = "Deutschland." In: *Augsburger Allgemeine Zeitung*. Außerordentliche Beilage. 1830, Nr. 170 vom 28. Oktober.
- Dietze = Herbert Dietze und Johannes Leipoldt, "Vom alten Gerichtswesen in

- den Dörfern des Stadtkreises Karl-Marx-Stadt." In: *Beiträge zur Heimatgeschichte von Karl-Marx-Stadt*. H. 13. 1965.
- Engel, Ernst, "Das Königreich Sachsen in statistischer und staatswirtschaftlicher Beziehung." In: *Jahrbuch für Statistik und Staatswirtschaft des Königreichs Sachsen*. 1. Jg. 1853.
- Feisenberger, Albert, "Anklage (Strafprozeß)." In: Fritz Stier-Somlo und Alexander Elster (Hrsg.), *Handwörterbuch der Rechtswissenschaft*. Bd. 1. Berlin und Leipzig 1926.
- Georgi, R., "Die Ermittlung der land-und forstwirtschaftlichen Bodenbenutzung im Jahre 1913." In: *Zeitschrift des K. Sächsischen Statistischen Landesamtes*. 62./63. Jg. 1916/1917.
- Gesetzsammlung = *Gesetzsammlung für das Königreich Sachsen*. 1818-1831; *Sammlung der Gesetze und Verordnungen für das Königreich Sachsen*. 1832-1834; *Gesetz- und Verordnungsblatt für das Königreich Sachsen*. 1835-1918.
- Groß, Reiner, *Die bürgerliche Agrarreform in Sachsen in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts*. Weimar 1968.
- Gruner, O., "Haus und Hof im sächsischen Dorf." In: Robert Wuttke (Hrsg.), *Sächsische Volkskunde*. 2. Aufl. Leipzig 1903.
- Hase, Carl August (Pseudonym Karl von Steinbach), *Sachsen und seine Hoffnungen*. Leipzig 1830.
- Haun, Friedrich Johannes, *Bauer und Gutsherr in Kursachsen*. Straßburg 1892.
- Jacobbeit, Wolfgang, *Schafhaltung und Schäfer in Zentraleuropa bis zum Beginn des 20. Jahrhunderts*. Berlin 1961.
- Judeich, Albert, *Die Grundentlastung in Deutschland*. Leipzig 1863.
- Körner, Paul, *Der Kampf um die Aufhebung der gutsherrlichen Gerichtsbarkeit im Königreich Sachsen bis zum Revolutionsjahre 1848*. Bückeburg 1935.
- Kötzschke 1931 = Rudolf Kötzschke, *Die sächsische Staats- und Gemeindereform 1830/31 und ihre Bedeutung für die Aufschwung des wirtschaftlichen und geistlichen Lebens im Lande, insbesondere in Leipzig*. Leipzig 1931.

- Kötzschke 1953 = Rudolf Kötzschke, *Ländliche Siedlung und Agrarwesen in Sachsen*. Remagen 1953.
- Kuntze, Hans, *Die Landgemeinde und ihre Stellung im Staate im Gebiete des Königreichs Sachsen unter Ausschluß der Lausitz vom 16. Jahrhundert bis heute*. Leipzig 1919.
- Lotze = M. Lotze und Georg Böhme, *Die Kgl. Sächs. Gesetze und Verordnungen über Jagd und Fischerei mit den damit in Verbindung stehenden reichs- und landesgesetzlichen Vorschriften*. Leipzig 1906.
- Lütge, Friedrich, *Die mitteldeutsche Grundherrschaft und ihre Auflösung*. 2. Aufl. Stuttgart 1957.
- 松尾 1971a = 松尾展成, 「三月革命期およびフランス革命期のザクセンにおける農民運動」, 『岡山大学経済学会雑誌』 3 卷 1 号, 1971 年。
- 松尾 1971b = 松尾展成, 「ザクセンにおける牧羊業の興隆と衰退」, 『岡山大学経済学会雑誌』 3 卷 2 号, 1971 年。
- 松尾 1972 = 松尾展成, 「ザクセン牧羊業の発展と農民経済」, 大野・住谷・諸田編『ドイツ資本主義の史的構造』, 有斐閣 1972 年。
- 松尾 1973 = 松尾展成, 「ザクセン「九月騒乱」期の同時代パンフレットにおける農業・土地問題」(I), 『岡山大学経済学会雑誌』 5 卷 1 号, 1973 年。
- 松尾 1978 = 松尾展成, 「ザクセン「九月騒乱」期の同時代パンフレットにおける農業・土地問題」(III), 『岡山大学経済学会雑誌』 9 卷 3 号, 1978 年。
- 松尾 1979a = 松尾展成, 「騎士領ヴィーデローダ所屬村落(北ザクセン)からの農民解放請願書」, 『土地制度史学』 82 号, 1979 年。
- Matsuo 1979b = Nobushige Matsuo, "Liptitzer Bauern klagen auch 1849 ihre Not." In: *Der Rundblick. Kulturspiegel der Kreise Wurzen-Oschatz-Grimma*. Bd. 26. Wurzen 1979.
- 松尾 1979c = 松尾展成, 「グローセンハイン郡(北ザクセン)における土地負担とその償却」(II), 『岡山大学経済学会雑誌』, 11 卷 2 号, 1979 年。
- Merkel, Wolfgang, *Die Entwicklung des evangelisch-lutherischen Kirchenpatronats im Königreiche Sachsen*. Borna-Leipzig 1908.

- Pätzold, Alexander, *Die Entwicklung des sächsischen Straßenwesens von 1763 bis 1831*. Halle (Saale) 1916.
- Pannach, Heinz, "Die Bedeutung der Gutsarchive für die Erforschung der Geschichte der sächsischen Bauern im Spätfeudalismus." In : *Archivmitteilung*. Bd. 25. 1975.
- Paterna, Erich, "Inquisition" In : Fritz Stier-Somlo und Alexander Elster (Hrsg.), *Handwörterbuch der Rechtswissenschaft*. Bd. 3. Berlin und Leipzig 1928.
- Petition = *Allerunterthänigste Petition der Amtslandschaft Dippoldiswalda mit Glashütte, Sr. Königl. Hoheit dem Prinzen Mitregenten durch den Herrn Cabinets-Minister von Lindenau, Excellenz am 25. Febr. 1831 ehrfurchtvollst überreicht*. Dresden 1831.
- Quirin, Karlheinz, *Herrschaft und Gemeinde nach mitteldeutschen Quellen des 12. bis 18. Jahrhunderts*. Göttingen 1952.
- Reinhardt, Paul, *Die sächsischen Unruhen der Jahre 1830-31 und Sachsens Uebergang zum Verfassungsstaat*. Halle 1916.
- Reißner 1972 = Manfred Reißner, "Bauer und Advokat in Kursachsen." In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*. Reihe Gesellschafts- und Sprachwissenschaften. Bd. 21. 1972.
- Reißner 1973 = Manfred Reißner, "Bauern vor und hinter den Schranken der Rittergutsgerichte im Gebiete des kursächsischen Amtes Borna." In: *Sächsische Heimatblätter*. Bd. 19. 1973.
- Römer 1788 = Carl Heinrich von Römer, *Staatsrecht und Statistik des Churfürstenthums Sachsen und der dabey befindlichen Lande*. Bd. 2. Halle 1788.
- Römer 1792 = Carl Heinrich von Römer, *Staatsrecht und Statistik des Churfürstenthums Sachsen und der dabey befindlichen Lande*. Bd. 3. Halle 1792.
- Schiffner, Albert, *Handbuch der Geographie, Statistik und Topographie des Königreiches Sachsen*. Bd. 2. Leipzig 1840.
- Schlesinger = Walter Schlesinger und Herbert Wolf, "Freiberg." In: Walter

- Schlesinger (Hrsg.), *Sachsen*. Stuttgart 1965. (Handbuch der historischen Stätten Deutschlands. Bd. 8)
- Schmidt 1966 = Gerhard Schmidt, *Die Staatsreform in Sachsen in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts*. Weimar 1966.
- Schmidt 1973 = Gerhard Schmidt, "Die sächsischen Amtshauptmannschaften 1875-1945 und ihre Vorläufer." In: *Lëtopis*. Reihe B. Bd. 20. 1973.
- Schumann = August Schumann und Albert Schiffner, *Vollständiges Staats-Post- und Zeitungs-Lexikon von Sachsen*. 18 Bände. Zwickau 1814-33.
- Sieber, Siegfried, "Vorschläge zu einer Wirtschaftsgeschichte des Erzgebirges." In: *Neues Archiv für Sächsische Geschichte*. Bd. 61. 1940.
- Steuern 1858a = "Die directen Steuern im Königreiche Sachsen." In: *Zeitschrift des Statistischen Bureaus des Königlich Sächsischen Ministeriums des Innern*. 4. Jg. 1858.
- Steuern 1858b = "Die indirecten Steuern im Königreiche Sachsen." In: *Zeitschrift des Statistischen Bureaus des Königlich Sächsischen Ministeriums des Innern*. 4. Jg. 1858.
- Stulz, Percy, "Die antifeudale Bauernbewegung." In: Percy Stulz und Alfred Opitz, *Volksbewegungen in Kursachsen zur Zeit der Französischen Revolution*. Berlin 1956.
- Verzeichnis = "Alphabetisches Verzeichnis sämtlicher Stadt- und Landgemeinden und selbständigen Gutsbezirke und der Wohnplätze, aus welchen die Gemeinden bestehen, mit Angabe der Einwohnerzahlen nach dem endgültigen Ergebnis der Volkszählung vom 1. Dezember 1905." In: *Statistisches Jahrbuch für das Königreich Sachsen*. 35. Jg. 1907.
- Volkszählung = "Die Volkszählung vom 1. Dezember 1905." In: *Zeitschrift des K. Sächsischen Statistischen Landesamtes*. 52. Jg. 1906.
- Wuttke 1893 = Robert Wuttke, *Gesindeordnungen und Gesindezwangsdienst in Sachsen bis zum Jahre 1835*. Leipzig 1893.
- Wuttke 1903 = Robert Wuttke, "Die Bevölkerung." In: Robert Wuttke (Hrsg.),

*Sächsische Volkskunde*. 2. Aufl. Leipzig 1903.

柳沢 治, 『ドイツ三月革命の研究』, 岩波書店1974年。

Zeichart, Emil, "Die selbständigen Gutsbezirke." In: *Zeitschrift des Sächsischen Statistischen Landesamtes*. 72:/73. Jg. 1926/27.

Zeise 1965a = Roland Zeise, *Die antifeudale Bewegung der Volksmassen auf dem Lande in der Revolution 1848/49 in Sachsen*. Diss. Potsdam 1965.

Zeise 1965b = Roland Zeise, "Die antifeudale Aktionen der Landbevölkerung in Sachsen im Frühjahr 1848." In: *Geschichtsunterricht und Staatsbürgerkunde*. Bd. 7. 1965.

Zeise 1966 = Roland Zeise, "Der Kampf um die Mobilisierung der Landbevölkerung in Sachsen im Frühjahr 1848." In: *Sächsische Heimatblätter*. Bd. 12. 1966.

Zeise 1968 = Roland Zeise, "Zur sozialen Struktur und zur Lage der Volksmassen auf dem Lande am Vorabend der Revolution von 1848/49 in Sachsen." In: *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte*. (Bd. 9) 1968. Teil I.

Zeise 1969 = Roland Zeise, "Das Verhältnis der antifeudalen Bewegung der Volksmassen auf dem Lande zur kleinbürgerlichen Demokratie in der Revolution von 1848/49 in Sachsen." In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der pädagogischen Hochschule Dresden*. Bd. 3. 1969.

Zeise 1970 = Roland Zeise, "Bauern und Demokraten 1848/49." In: *Jahrbuch für Regionalgeschichte*. Bd. 4. 1970.

Zeise 1972 = Roland Zeise, "Einige Bemerkungen zum Verhältnis zwischen kleinbürgerlicher Demokratie und der antifeudalen Bewegung der Volksmassen auf dem Lande in der Revolution von 1848/49 in Sachsen." In: *Jenaer Beiträge zur Parteigeschichte*. H. 32./33. 1972.